小矢部市埋蔵文化財調査報告書第21冊

富山県小矢部市

桜町遺跡

――県道改良工事に伴う雀谷地区の調査――

1987

小矢部市教育委員会

小矢部市埋蔵文化財調査報告書第21冊

富山県小矢部市

桜町遺跡

——県道改良工事に伴う雀谷地区の調査——

1987

小矢部市教育委員会

例　　言

1．本書は昭和60年7月から昭和61年6月にかけ、主要地方道小矢部・伏木港線特殊第1種改良工事に先立ち、小矢部市教育委員会が富山県の委託を受けて実施した桜町遺跡（雀谷地区）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査及び本書の作成は、小矢部市教育委員会社会教育課嘱託山森伸正・林　浩明が担当した。なお発掘調査から報告書の作成にいたるまで、安念幹倫（富山県教育委員会文化課文化財保護主事）伊藤隆三・高木場万里（小矢部市教育委員会社会教育課主任・同主事）大竹　豊（富山大学考古学研究室）、千竜永恭子・杉森加代子・早助よし子・八谷邦子・小竹知子ほか各氏の協力を得た。

3．本文はⅠ、Ⅲ—3（縄文時代）、Ⅳを山森が、Ⅱ、Ⅲ—1・2・3（弥生時代以降）を林がそれぞれ分担し、花粉分析報告はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

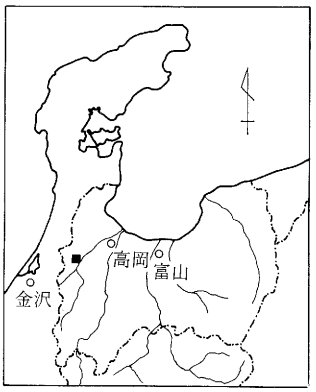
4．本書の作成にあたって、縄文土器については酒井　重洋氏（富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事）から、自然環境及び出土種実の同定については吉井亮一氏（金沢大学大学院理学研究科）から、出土木樹種識別については飯島泰男・長谷川益夫両氏（富山県木材試験場研究員）から、地形環境については竹村利夫氏（北陸工業専門学校助教授）から懇切なる御指導、御助言をいただいた。厚くお礼申し上げるしだいである。

目　　次

Ⅰ．位置と環境……1
Ⅱ．調査の経緯……3
　1．調査に至るまで……3
　2．発掘調査……3
　3．試掘調査区出土の遺物……4
Ⅲ．遺構と遺物……7
　1．A区……7
　2．B区……11
　3．C・D区……15
Ⅳ．まとめ……26
附．桜町遺跡（雀谷地区）花粉分析報告（パリノ・サーヴェイ）……30

Ⅰ　位置　環境

小矢部市は富山県の西端中域に位置し、西を標高300mを越えない丘陵性山地（宝達山地）によって石川県と境界をなす。市域の北部ではケスタ地形を呈する新第三紀層からなる石動丘陵（標高50～250m）が北東方向へ連なる[3]。石動丘陵裾部では石動断層が丘陵と平行に走る。この断層は丘陵の背斜が何らかの形で隆起し断層以南では土層が垂直なほどに立ち、断層と平行に帯状の異なる土層が表層面に露呈するようである[2]。そのため高岡から福岡にかけての丘陵と平野との間は台地の発達が少なく崖状を呈し、崖下には丘陵沿いに小矢部川が北流する。なお崖の露頭する砂岩層からは海性の貝やウニの化石などが広く分布することでよく知られる。

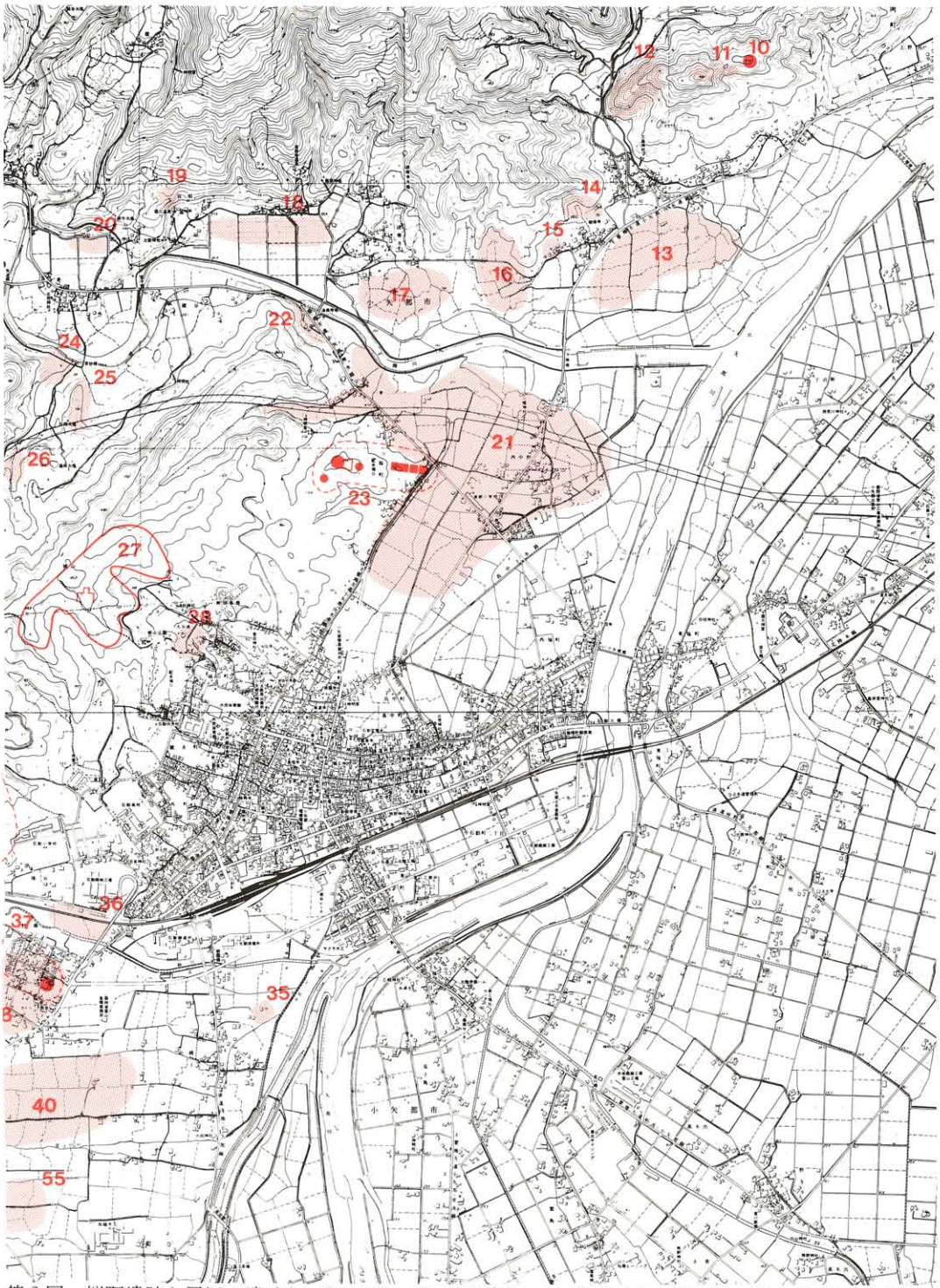


第1図　小矢部市の位置

県内でも稀に緩く流れる小矢部川は石動（小矢部市街地）以北で蛇行がみられ、扇状地を横切る庄川との合離流の影響も考えられるが、島・帯状の微高地（自然堤防）が数多く形成される。県西部の主本流で砺波平野の扇状地を形成した庄川は、古くは西流して小矢部川の中流域と合流していた。その後、庄川は小矢部川との合流点をしだいに下流へと移し、現在に至ったとされる[1]。合流点を下流へと移す間には出水のたびに運ばれた土砂かたまり、ところどころに沼や洲ができていたとされる。近世、加賀藩政当時の文書（町年寄から藩に提出された由緒書）によれば葭原・池田の二部落が前田利秀の時代に今石動と改めたといわれる[4]。葭原は葦の繁茂していた湿原を意味し、石動市街地の小矢部市役所・電報電話局の基礎工事の際には地下10mまでも有機質（ヨシの地下茎らしいもの）を多く含む泥土であったという。今回調査を実施した石動市街地の北縁でも多少の深浅はあれ、葦の根・茎などの有機質を多く含む黒色泥炭質土層が広範に発達していた。

桜町遺跡は北流する小矢部川の左岸段丘上（標高25～45m）にあり、遺跡の北には宮島峡から石動丘陵を割って流れる子撫川が東流する。遺跡の西は急傾斜な丘陵とで隔てられ、子撫川と小矢部川に挟まれる自然堤防とその後背地に立地するといえる。遺跡の規模は南北0.8km、東西1km、総面積約60万m^2を占め、縄文時代早期から現在に至るまでの複合（重層）遺跡と推定される。昭和55年から開始した国道8号小矢部バイパス建設に伴う発掘調査は現在も進行中であり、これまでに蓄積された資料は膨大な量にのぼる。遺跡範囲の中ほどを東から西へ順に調査をすすめてきたが、西の丘陵側ほど古い時期との重層がみられ、地区ごとで遺構・遺物の種類・密度が異なり、時期ごとに分布範囲が細分できうるようである。

今回調査を実施した雀谷地区は小矢部市桜町字雀谷に所在し、桜町遺跡の南部域に位置する。前述の如く地下からは旧低湿地であったことを示す土層が堆積し、空中写真（図版2）でも東側に島状の微高地（自然堤防）がみられることから、自然堤防後背湿地に立地するといえよう。



第2図　桜町遺跡と周辺の遺跡（1／25,000）　13. 田川遺跡、14. 田川三角山横穴群、15. 田川三角山東遺跡、16. 田川三角山西遺跡（縄文・奈良～平安）、17. 法楽寺遺跡、18. 宮須遺跡、19. 桐ノ木谷遺跡、20. 宮中北遺跡、21. **桜町遺跡**、22. 桜町横穴群（1～11号穴）、23. 天狗山古墳群（1～7号墳）、24. 宮中遺跡（縄文前期）、25. 屋波牧遺跡（縄文中・後期）、26. 屋波牧南遺跡（縄文）、27. 今石動城跡（近世）、28. 城山町遺跡（縄文）、30. 後谷古墳群、36. 下川原遺跡（弥生末期～奈良）、37. 野端古墳群（1～3号墳）、38. 大勢町遺跡（縄文中期・古墳・奈良）、40. 北反畝遺跡（奈良～中世）、43. 埴生竹亭窯跡（近世）、53. 若宮古墳

II　調査の経緯

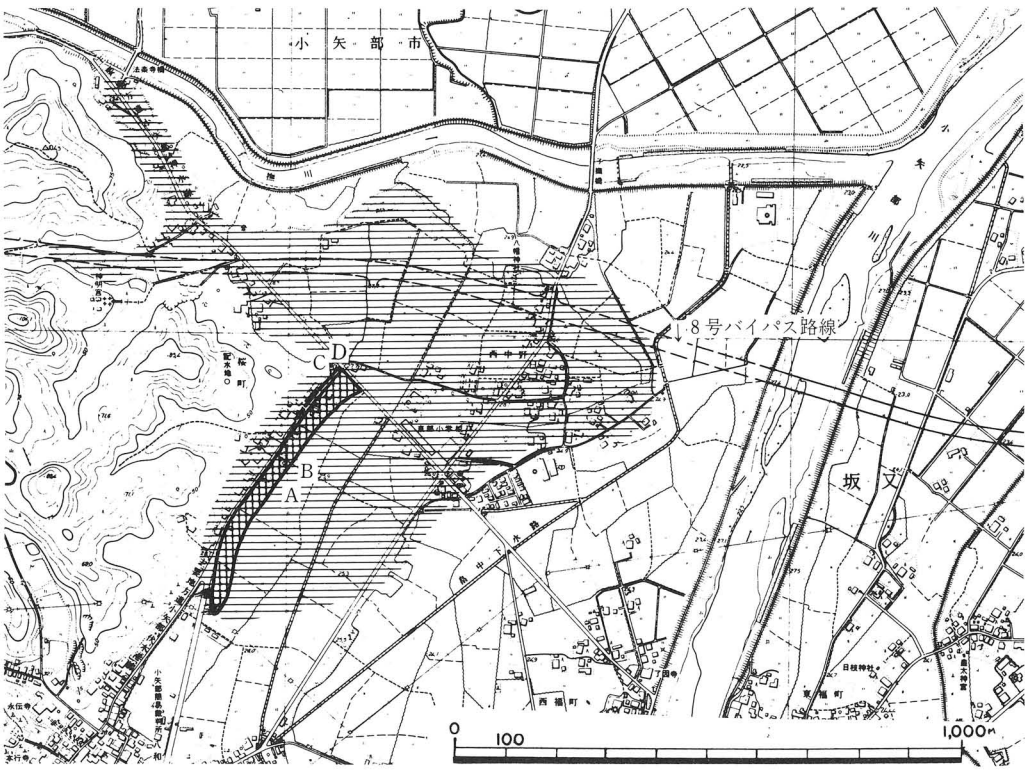
1．調査に至るまで

昭和47年、国道8号線の小矢部市内での混雑を解消するためにバイパス建設が計画され、昭和52年に路線が決定した。この路線内桜町地内には、従来桜町A・B遺跡として小遺跡2箇所が知られているだけだった。一方小矢部市教育委員会では、昭和54年秋から5年計画で市内全域を対象とした分布調査を実施する事となり、初年度分としてバイパス予定路線を含む地区の調査を行なった。この結果桜町遺跡は桜町から西中野地内にかけての東西約1km、南北約0.8kmにもおよぶ広大なもので、桜町A・B遺跡はその一部にすぎないことが判明した。この成果をもとに昭和55年以来バイパス建設に先だって発掘調査が続けられている。

このバイパス建設にともなって小矢部市街地とバイパスとを結ぶ主要地方道小矢部・伏木港線の改良拡幅工事が行われることになり、桜町遺跡内については県土木工事事務所、市教育委員会による協議のうえ、事前に発掘調査を実施することになった。

2．発掘調査

小矢部・伏木港線の改良工事にともなう桜町遺跡の発掘調査は、昭和57年～昭和61年にか



第3図　桜町遺跡と調査対象地区（1／15,000）

けて実施した。このうち昭和57年度分については報告書が刊行済であるので、60･61年度の調査について述べる。

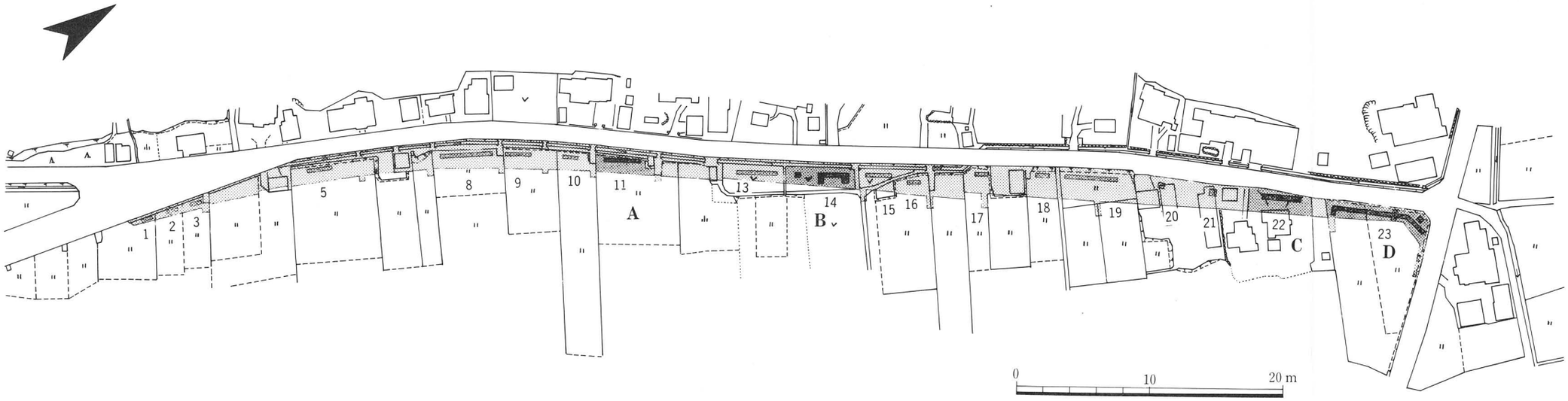
調査は昭和60年7月4日～昭和61年6月10日にかけておこなった。調査対象となる拡幅部分が狭長なうえ、民家、納屋等の移転が完了していなかったため、現状に応じて幅1.5～2mで任意の長さにトレンチを設定して試掘調査をおこない、その結果必要と認められた地区について本調査を実施することとした（第4図）。

第1次調査は昭和60年7月4日～60年7月25日にかけ、全線を対象としておこなった試掘調査である。調査の結果ほとんどのトレンチから遺物が出土し（表1）、遺跡はさらに南へ広がる可能性を見せたものの、No. 11, 14, 22, 23トレンチを除いて遺物の密度は稀薄であり、本調査はおこなわないこととした。前述の4箇ヶ所については、No. 11から土師器･須恵器、No. 14から土師器、No. 22･23からは縄文土器、弥生土器、植物遺存体が多数出土し、それぞれ本調査の対象とした（No. 11地区－A区、No. 14地区－B区、No. 22地区－C区、No. 23地区－D区）。第2次調査は上記D地区の本調査で、昭和60年8月10日～昭和60年8月24日にかけて、また第3次調査は残るA～C区の本調査で、昭和61年4月22日～昭和61年6月10日にかけ実施した。A～D区の調査結果についてはIIIで述べることにする。

3．試掘調査出土の遺物（本調査に至らなかったトレンチ出土・第5図）

1はNo. 5トレンチ出土の磨製石斧で、全長6.0cm、刃部幅2.5cmの小型品。ジャモン岩製とみられる。2の土師器高杯脚部は内面に粘土紐接合痕が残る。3・4は須恵器蓋と杯。3は平坦な天井外面をロクロナデによって仕上げる。偏平なつまみがつき、焼成は良好。胎土は緻密だが比較的大きめの砂粒を含む。A区出土の破片と接合した。4は推定口径約11.3cm、器高4.0cmとなる。体部中央から外反気味に開き口縁にいたる。低いがふんばりの強い高台をもつ。調整は内外面ともにロクロナデ、高台内の底面に爪形の圧痕がある。焼成は良好、胎土に砂粒を若干含み、微小な黒斑が全面に認められる。3・4ともNo. 9出土。5はNo. 3出土で杯底部とみられ、高台径6.8cm、全体に風化がひどく調整不明。6は土師質小皿で暗褐色を呈し、口縁付近には煤が付着している。灯火皿として使用されたと考えられる。口径8.0cm、器高1.3cmでNo. 2からの出土。7は羽釜の小片で口径は20cm前後、口縁は内傾し、胴部最大径の位置に鍔がつくようである。口縁端、鍔端部とも丸くおさめる。胎土には砂粒を多量に含む。8は珠洲系陶器のスリ鉢。8条1単位からなるオロシメを施す。胎土には細かな砂粒を多量に含む。低部は静止イトキリ。7・8ともにNo. 5出土。

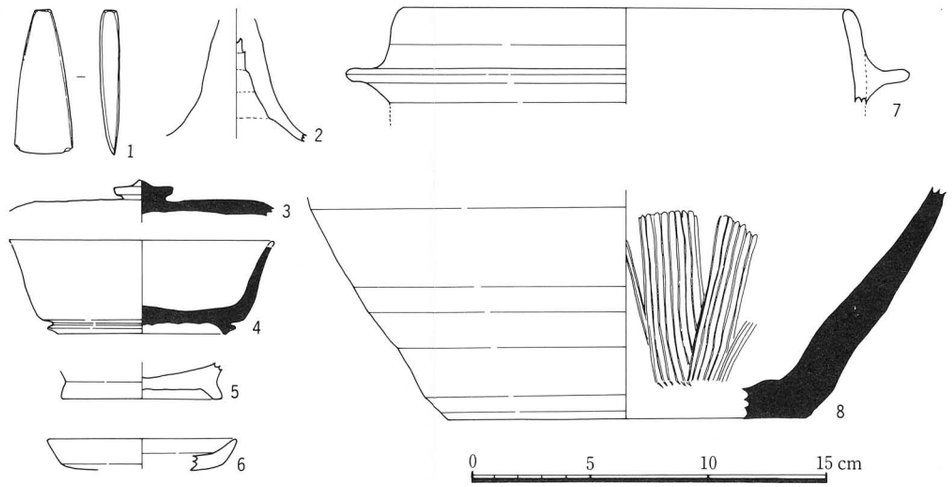
上記の遺物はそれぞれ、1が縄文時代、2が古墳時代、3・4が奈良時代、5が平安時代のものであろう。8のスリ鉢は吉岡編年IV～V期の室町時代ごろと考えられ、6・7についてもほぼ同時期におけよう。羽釜の県内における出土例は少ないが、市内竹倉島遺跡でも室町期の珠洲系陶器などと共に出土している。



第４図　雀谷地区トレンチ配置図（１～23、４・６・７・12は欠番）及び本調査区（A～D）　（１／2,000）

表１　試堀調査結果一覧

トレンチNo.	大きさ(m)	出　土　遺　物	土器数	時　代	備　考
1	1.5× 2		0		
2	1.5× 5	土師器	3	古墳、平安	第５図
3	1.5× 5	土師質土器	1		〃
5	1.5×10	須恵器・珠洲系陶器・羽釜他	3	奈良・室町	〃
8	1.5×20	磨製石斧・須恵器	1	縄文・奈良	〃
9	1.5×10	須恵器	1	奈良	〃
10	1.5× 6	土師器	1	？	
11	1.5×14	土師器・須恵器他	多	古墳～中世	A区
13	1.5×15	縄文土器	2	縄文（晩）	
14	27 m²	土師器・須恵器	多	古墳～奈良？	B区
15	1.5×10	須恵器・土師質土器	2	平安？	
16	1.5× 5	土師質土器？	1	？	
17	1.5× 5	須恵器	1		
18	1.5× 5	縄文土器　（自然遺物）	1	縄文（晩）	
19	1.5×20	〃	0		
20	2 ×2.5	〃	0		
21	2 × 3	〃	0		
22	2 ×15	縄文土器　〃	多	縄文（後・晩）	C区
23	2 ×80	縄文、弥生土器、須恵器〃	〃	〃　弥生(後)	D区



第５図　試掘調査区出土土器（１／３）（１—No. 8、２・６—No. 2、３・４—No. 9、５—No. 3、７・８—No. 5の各トレンチ出土　本調査を行なった地区は含まない）

Ⅲ　遺構と遺物

1．A区

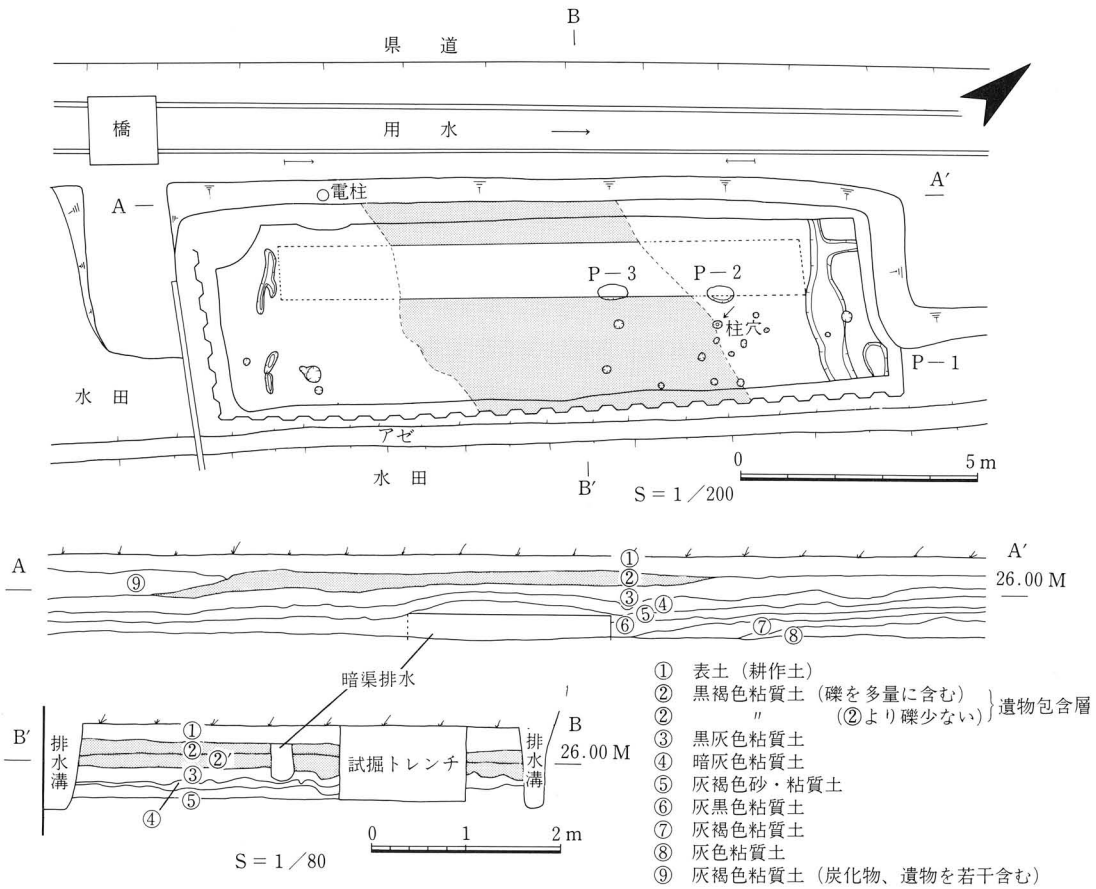
調査区のほぼ中央部に位置する丘陵直下の水田である。調査区内の層序は第6図に示すように上から①耕作土、②・②′礫まじり黒褐色粘質土、③黒灰色粘質土、④暗灰色粘質土、⑤灰褐色砂質土となり、地層は全体に北から南へわずかながら傾いて堆積している。このうち②・②′の礫まじり黒褐色粘質土層（以下礫まじり層と略す）が遺物包含層である。遺構は、③～⑤層に切り込んで検出された。

遺構（第6図）

検出された遺構には溝、柱穴、小ピット群がある。

溝は、調査区北端にあり、山側から平野側へ伸びるものと、これに直角に合流するものからなる。幅は0.3～1m、深さは10cm余りと浅い。溝内は細かな砂粒によって埋り、埋土中から遺物は出土していない。

柱穴（第7図）は礫まじり層除去後に検出され、検出面での直径23cm、深さは47cmで下部



第6図　A区遺構平面・土層断面

になるほど径が小さくなり、内部には柱根が残存していた。現在径8cmと細い丸太を樹皮がついたまま利用している。

ピット群は浅い楕円形のもの(P－1～3)と小さな円形のものとに分れる。このうちP－1としたものは調査区東隅にあり、長径約1m、短径約0.6m、深さ10cm余りで埋土中には炭化物を多く含む。埋土中から土師器小片が1点出土している。P2・3も同様の状態であった。小ピット群のうちには先の柱穴に対応するものが含まれる可能性もあるが、特定するには至らなかった。

礫まじり層は幅5m余り、厚さ約30cmで層中に2･3cm～10cm程の円礫を多量に含み、調査区を東西に横切る(第6図スクリーントーン)。これ以外の層中に礫はほとんど含まれず、また遺物の出土が礫まじり層部分に集中することから、何らかの人為的所作によって礫が持ち込まれたとも考えられる。なお、調査区南端の溝状あるいは円形の不整な落ち込みは、土層堆積時に部分的に生じた性質のものであろう。

遺物（第8・9図）

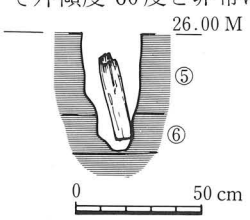
A区からは土師器（杯類、高杯、甕、土錘）、須恵器（杯類、壺・甕類）、珠洲系陶器（甕）が出土している。

土師器

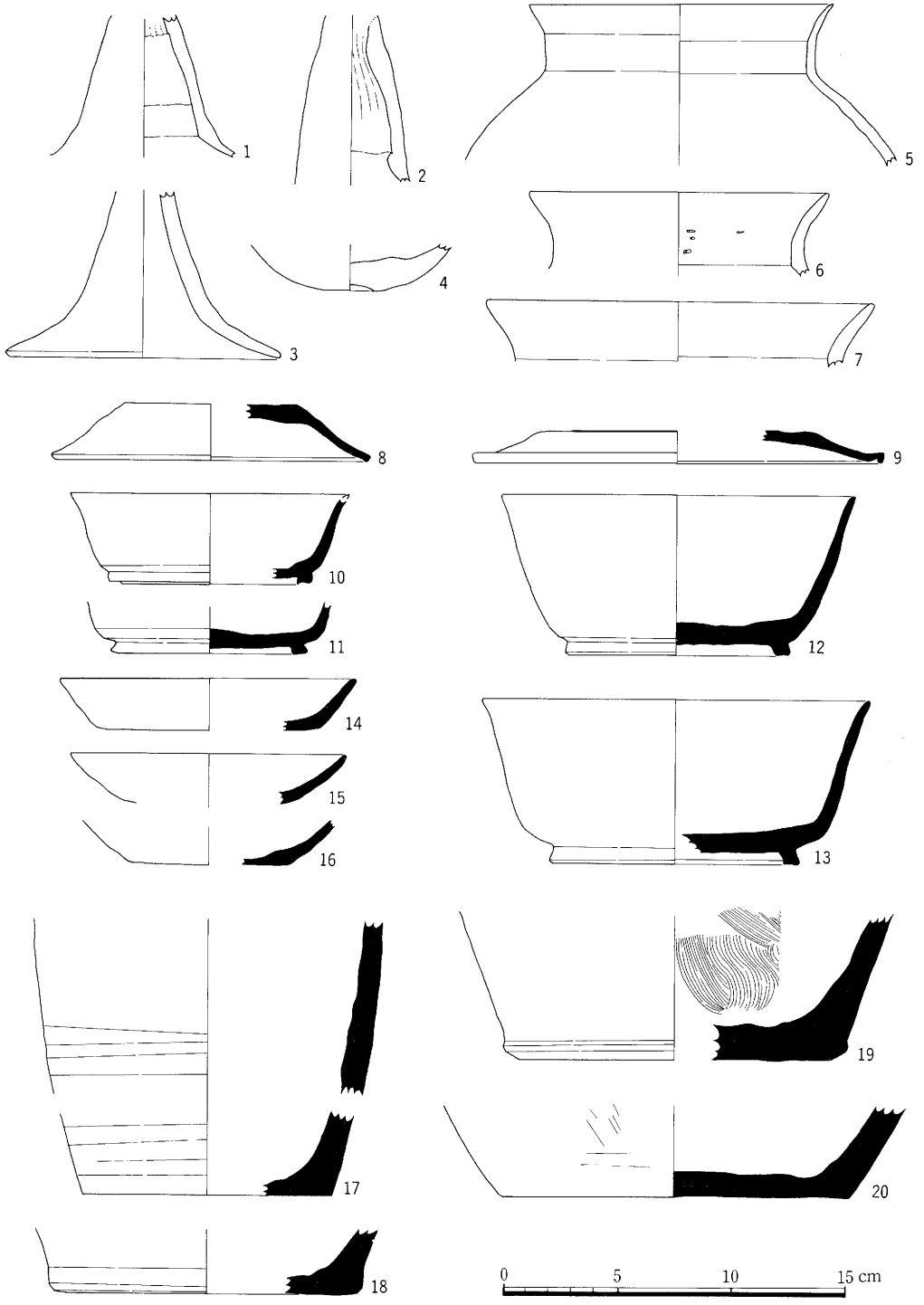
高杯（1～3）いずれも脚部のみで、すそは屈曲して広がる。内面に粘土紐接合痕の残る場合がある。色調は黄灰色～淡黄色で1･3の胎土には砂粒を多く含んでいる。調整は3の外面に縦方向のヘラミガキをおこなっているほかは不明。

甕（4～7・31～33）古墳時代と奈良～平安時代のものがある。前者（4～7）は口縁部が「く」の字状を呈するもので、5は口縁中ほどから外反が強くなる。後者（31～33）は口縁端部を短くつまみあげる31、上方へ折り曲げる32、器壁が薄く立ちぎみで、口縁は内湾したのち端部でわずかに外反する33とがある。色調は黄灰色を呈する場合が主で、胎土には31・32をのぞくいずれの土器も多くの砂粒を含んでいる。調整は保存状態が悪く、5の外面がハケ、32･33の内外面がロクロナデとみられるほかは不明瞭。口径は5･6が約13cm、7が17cm、31～33は19～22cm前後となる。

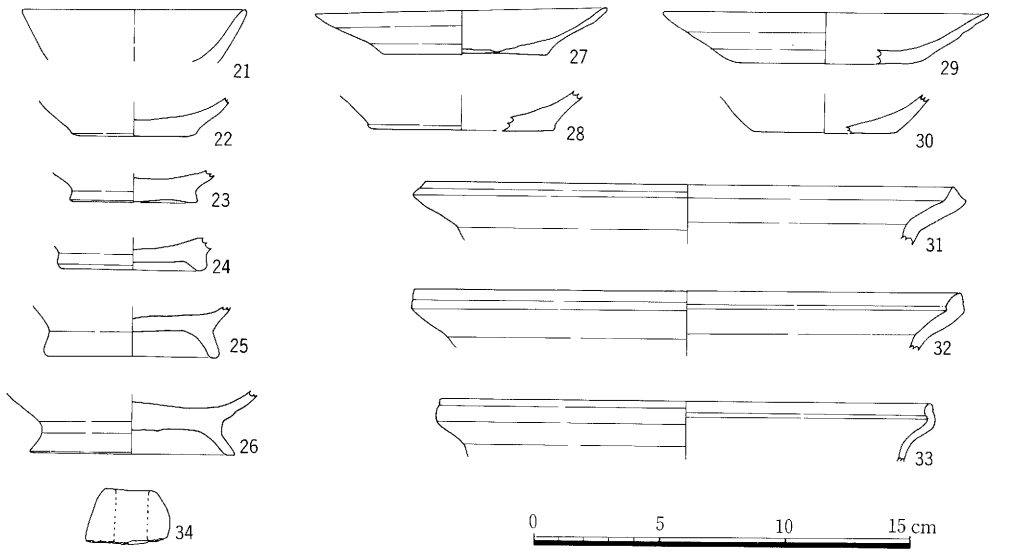
杯類（21～30）底部のみの破片が多く、器形は定かでないものが多い。高台の有無によって、高台をもつもの（24～26）と高台をもたないもの（22･28～30）に分けられる。21を除いて体部の傾きの大きな浅い器形となる。全形のわかる27は口径11.5cm、底径6.5cm器高1.8cmで外傾度60度と非常に偏平である。風化がひどいため調整のわかるものは少ない。27･28の底面にイトキリ痕が残る。他の個体もイトキリによって切り離されたものであろう。29の口縁部には、ススが付着しており、灯火皿としての使用をうかがわせる。ただ29は須恵器焼成不良品の可能性が高い。色調は21･26が赤褐色のほかは黄灰色系を呈するものが多い。23･24は内面黒色で内黒土器の可能性がある。21･24以外の胎土には砂粒が目立つ。34



第7図　柱穴断面
（1／30）



第８図　A区出土土器（１／３）



第9図　A区出土土器（2）（1／3）

は土垂で1点だけ出土している。赤褐色で胎土中の砂粒はわずかである。

須恵器（8～20）

杯蓋（8・9）8は天井平坦面が広く肩部で屈曲して口縁部にいたる。口縁部は内面の強いナデによってようやく天井部と区別され、退化が著しい。杯身とも考えられる。9は大型・偏平で口縁付近が屈曲し、端部は短く下方に折りまげる。調整は共に内外面ともロクロナデ、8天井外面はヘラキリのまま未調整。口径は8が14 cm、9が18 cmを測る。焼成は良好で青灰色を呈する。

杯（高台を持つもの10～13）口径によって大（12・13）小（10・11）に分かれる。10・12は底部外縁に、11・13ではやや内側に高台が付く。いずれの高台も低くふんばりは弱い。体部はわずかに丸味をおび、口縁部で外反気味となる。口縁端部は丸くおさめる。調整は大型の12が底部内面に、13では底部外面にもナデを施している。法量は、10が口径12 cm，器高4 cm（推定）12が15.5 cm，7.1 cm　13が17.0 cm，7.2 cmである。11の高台内側にヘラ記号「×」がある。焼成は11を除き良好で灰色～青灰色、13は赤紫色を呈する。12の内面には漆とみられる皮膜が付着している。

杯（無高台　14～16）外傾度の大きな浅いものが多く口径11 cm～12 cm、器高2.3 cm～2.6 cmを測る。底部切り離しはヘラキリとみられる。焼成は16が良好で淡青灰色、14・15は不良で灰白色を呈する。

壺類（17～20）いずれも底部で平底となる。体部との境がシャープな稜をなす17・20、面トリ風な18・19がある。17の外面下半はロクロケズリ、17～20が静止ケズリ、19の内面にハケメを残す他は内外面ともロクロナデを、17・20の内底面にはナデを行なっている。焼成は良好。

2．B区

丘陵裾から小さく舌状に張り出した部分で、A区の北側に隣接し、東西約20m、南北約40mの広がりをもつ。水田面から0.5m～1mの高さがあり、調査前は畑として利用されていた。試掘調査区ではNo. 13, 14, 15トレンチの一部が該当し、No. 14にだけ遺物が集中して出土した。B区の層序は上から、①耕作土、②灰～黄褐色土、③褐色～灰褐色土、④黒褐色土、⑤暗褐色土、⑥灰褐色土、⑦褐色砂質土の順で、全体に丘陵側から水田側へゆるやかに傾斜している。このうち④層が遺物包含層で、上下の③・⑤層にも若干の遺物が含まれている。

遺構（第10図）　B区で検出された遺構には溝、溝状落ち込み、小ピットがある。溝は調査区南端を北西から南東方向に走り、幅約1m、深さ20cm前後を測る。溝内には砂が堆積していた（⑨）。出土遺物はなかった。溝状落ち込みとしたものは中央南寄りにあり、枝わかれした3本からなる。左右のものは途中で消滅し、中央の溝も一度とぎれたり、袋状の部分があったりするなど、人為的な遺構とは考えにくく、あるいは小動物の巣穴だったのかもしれない。他に平行する数条の溝や小ピットなどがあるが遺物はともなわず、時期・性格等は不明である。

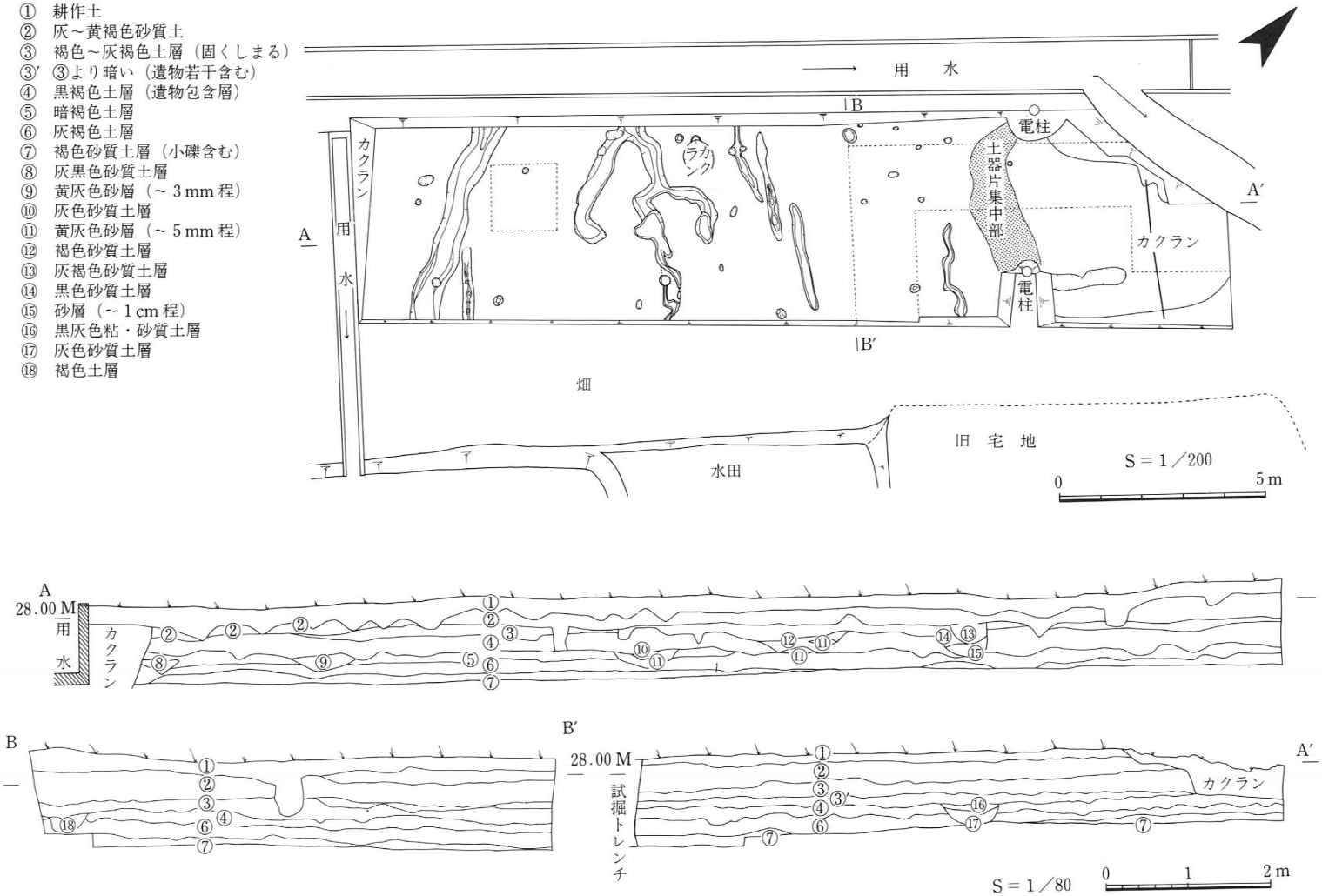
遺物（第11図）　包含層④からの出土がほとんどで、上下の③・⑤層と耕土中からも若干出土している。部分的には土器の分布が濃密な場所もみられたが、細片化が著しく2次的に生じたものである可能性が高い。明確に遺構にともなった土器はなかった。

出土遺物は千数百片をかぞえるが、ほとんどすべて土師器で占められ、他には須恵器が③層と耕作土中から数点ずつ出土したにすぎない。土師器は風化がすすんだ細片であることから、復元、実測できたものはわずかしかない。確認できた器種に、土師器では高杯、甕、杯類が、須恵器には杯、壺類がある。

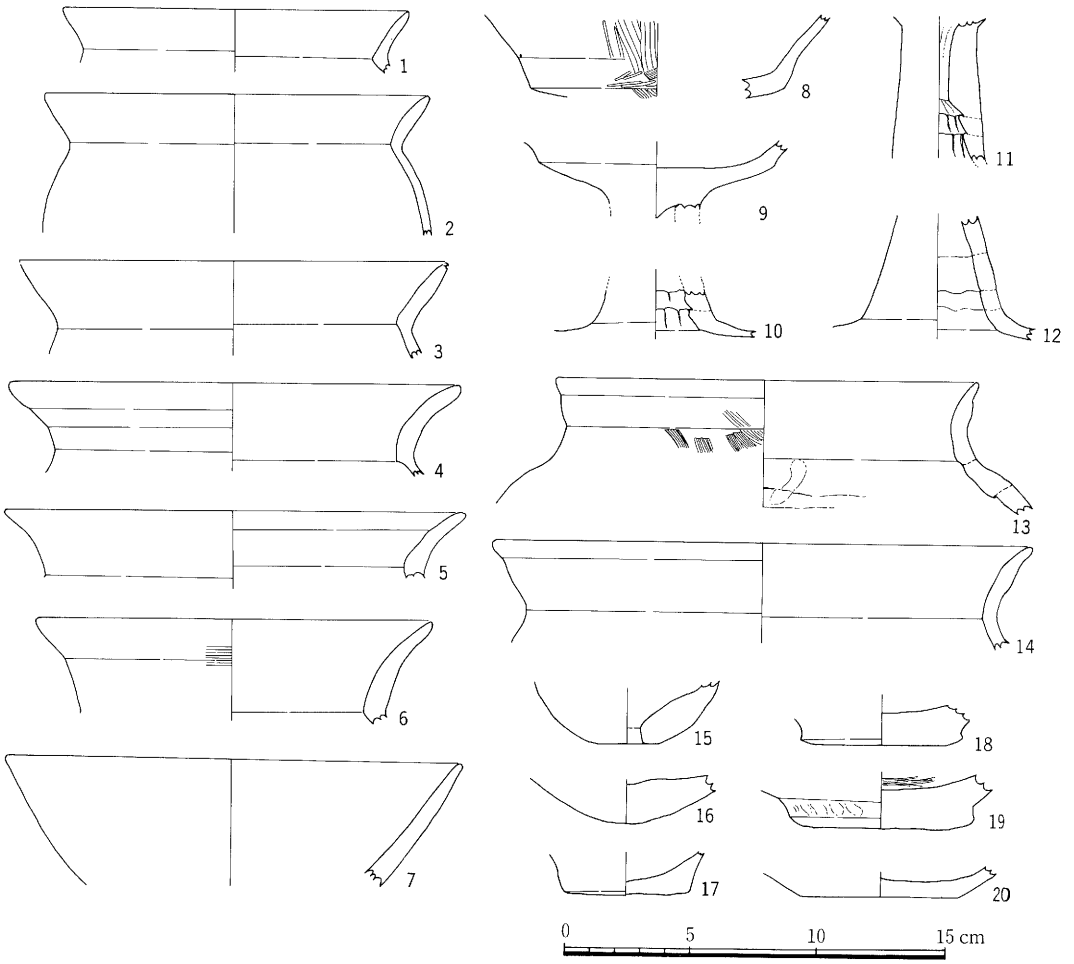
高杯（8～12）B区出土土器のうちでは比較的目立つ存在である。全体を知りうるものはないが、杯部に稜をもち、口縁部は外反し、筒状あるいは「ハ」の字状に開く脚部が下方で屈曲して大きく広がるタイプとなろう。脚部内面には粘土紐接合痕が明瞭に観察できる。8の外面にはヘラミガキをおこなっている。色調は9が明赤褐色のほかは全般に灰黄色を呈し胎土には若干の砂粒を含んでいる。

甕（1～6，13・14）13を除きいずれも「く」の字状を呈する口縁部で、直線的に外方へのびるもの（1～3）、外反するもの（4～6）、端部付近で外へ屈曲するもの（14）があり、体部内面との境は明瞭で稜をなす。13は直立気味に外反し、体部との境界は不明瞭で内面には粘土紐接合痕、指圧痕がみられる。口縁端部はいずれも丸くおさめ、面をもつものはない。6・13の外面にわずかにハケメが残るほかは調整不明。色調は2・4が赤褐色、そのほかは灰黄色～黄褐色。胎土に砂粒を多量に含む個体が多い。口径は13～18cm、14が21cmと若干大きい。16・18・19は甕底部で、丸底の16と平底の18・19があり、後者の側面には指頭圧痕がつく。色調は内面暗褐色～暗灰色、外面が黄灰色～黄褐色を呈し胎土に多くの砂粒を含んでいる。15は焼成前に穿孔された底部で、内面の一部にハケメが残るほかは調整不明。内面黄褐色、外面暗灰色で胎土に細かな砂粒を多く含む。

① 耕作土
② 灰～黄褐色砂質土
③ 褐色～灰褐色土層（固くしまる）
③′ ③より暗い（遺物若干含む）
④ 黒褐色土層（遺物包含層）
⑤ 暗褐色土層
⑥ 灰褐色土層
⑦ 褐色砂質土層（小礫含む）
⑧ 灰黒色砂質土層
⑨ 黄灰色砂層（～3mm程）
⑩ 灰色砂質土層
⑪ 黄灰色砂層（～5mm程）
⑫ 褐色砂質土層
⑬ 灰褐色砂質土層
⑭ 黒色砂質土層
⑮ 砂層（～1cm程）
⑯ 黒灰色粘・砂質土層
⑰ 灰色砂質土層
⑱ 褐色土層



第10図　B区遺構平面・土層断面



第11図　B区出土土器（1／3）

杯類（7・20）7は大型の椀か高杯であろう。内外面ともヨコナデで口径約18 cmを測る。20は3層からの出土で、底部はイトキリ。このほか手ずくね土器とみられる17がある。

須恵器については杯口縁部、小型の壺類とみられる細片があるが、図示できるものではなかった。

A・B区出土の土器の時期は古墳時代と奈良・平安時代に分かれ、A区の一部とB区のほとんどの土器は古墳時代のものである。このうちB区出土土器が、1）甕口縁部は「く」の字形を呈し、口唇部が丸くあるいは先細りに仕上られ、面を持つものが見られないこと、2）高杯は杯部に稜をもち、脚は裾部で折れて広がるタイプで、脚内面に粘土紐接合痕を残す場合が多く、全体的に小ぶりであることなどの特徴から、北陸土師器第Ⅴ様式とされる市内竹倉島遺跡とほぼ同時期においてよいであろう。ただB区では須恵器、内面黒色土器をともなわない点で異り、また杯類の存在自体が不明瞭であるなど、竹倉島遺跡に比べて時期的に逆のぼる可能性がある。

A区の古墳時代土器も同様の時期であろう。6世紀前半以前の年代が考えられよう。

一方A区で主体をなすのは平安時代の土器である。北陸地方の奈良・平安時代の土器は吉岡氏によってVI期区分した編年が示されている。その研究成果からA区の土器を位置付けるとすれば、土師器杯類の半数近くが高台を持ち、25・26のように非常に高い例も現れていることから、高台を持つ杯類が普及するV期でも、新しい時期にくおくことができ、VI期にかかるものが含まれる可能性もある。また8・9・12・15・16等の須恵器もV期前後としてよいであろう。相違点として、V期の共膳形態土師器の半数近くを占めるとされる内面黒色土器が少ないことがあげられる。これは地域的な特徴と思われる。このほかに、13、31など奈良時代にまでさかのぼる土器がある。実年代はやや幅を持たせて8世紀～10世紀代としておきたい。

3．C・D区

調査（第4・13・14図）

調査対象の北端、主要地方道小矢部・押水線と本線の交差する付近である。急傾斜な丘陵先端部南裾下（標高26～27m）にあたり、本地区の北、東、南は平坦な水田平野が開ける。従前より桜町遺跡範囲内であり、奈良時代の須恵器・土師器片が分布することが知られた。昭和60年7月初め、交差点の南（D区）の試掘で須恵器・土師器片とともに下層より縄文土器が2個体ほどまとまって出土した。同60年7月後半には工事対象部分全線の試掘を実施し、D区南に隣接するC区の試掘の結果、下層にはD区以上に縄文土器が豊富に包含されることがわかった。なお、C区のさらに南の試掘坑では有機質包含黒色土の堆積がB区付近の微高地まで続くのであるが、遺物の出土は極めて断片的であり、C区より南へはさほど広がらないものと考え、縄文時代の全面調査範囲をD～C区間までに限定した。

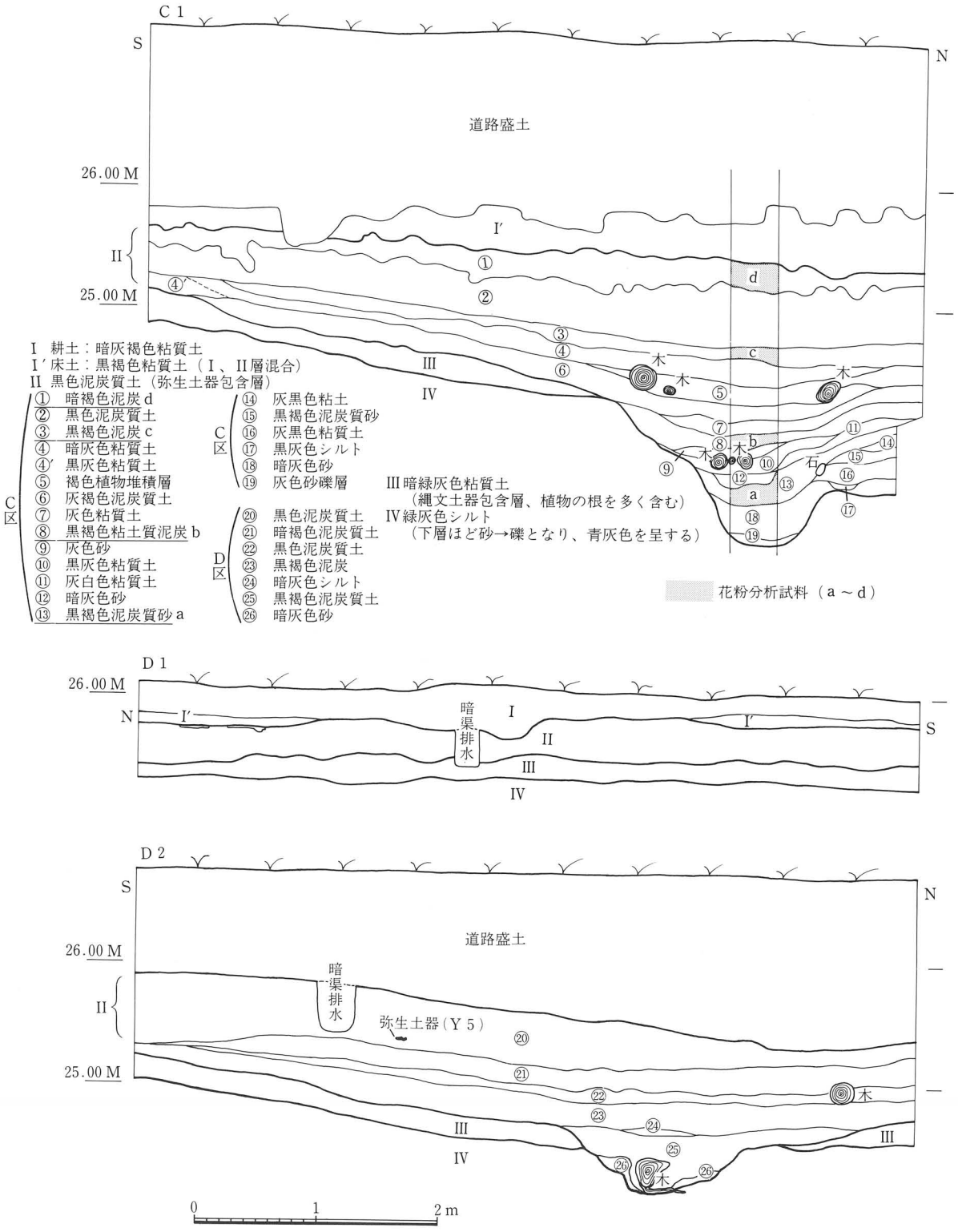
昭和60年8月にD区を、昭和61年5月にC区の全面発掘を実施したが、D区では試掘トレンチで一括出土した条痕文土器2個体以外にはまとまった遺物はなく、断片的な破片が散出する程度であった。これに対しC区ではまとまった出土遺物があり、復元可能な土器も6～7個体とD区よりも多い。しかしながら調査区が幅狭であり、また不運にも調査区境界である道路下ないしは水田下へまたがっての出土がほとんどで、横穴を掘って遺物をかき出すという状態であった。

土層（第12～14図）

大別して、I層—水田耕土及び攪乱土、II層—有機質包含黒色泥炭質土、IV層—緑灰色シルト層の3分層からなる。III層はII層とIV層の漸移層で上層（II層）からの葦の地下茎、根などが入り込む暗緑灰色土を呈する。I層からは須恵器・土師器片が数点包含される程度で遺構は検出できない。II層黒色泥炭質土はかつて湿地であったことを示す有機質が多く含まれ、丘陵・湿地縁辺部から転落、流入したであろう樹木も混入する。II層中には弥生時代後期の遺物としてD区西側断面から有段口縁の甕片が、C区から大型の壺が出土した。縄文土器（縄文時代後・晩期）はII層下部及びIII層から出土したものがほとんどであり、II層は弥生時代以降の堆積と考えられる。C区南の溝付近の厚く堆積するII層黒色土は、植物遺体層や灰色粘土の互層などがみられ、常に環境が一定であったとは考えられず、乾燥したり潤ったりあるいは溢れたりなどの変化によって植生にも影響が及んだものと推察される。III層は縄文時代後期後葉と晩期後半の遺物包含層で有機質を含むが腐泥化した黒色をなさないため、該期に湿地が形成されていたとは考えにくい。むしろ小矢部川自然堤防の後背湿地となる前、安定した段丘上に縄文人が入り込んだものと考えたい。IV層は粘りけのない粘土性シルトで下層ほど青灰色をおびる粗粒となり砂礫化する。

遺構（第13・14図）

II層黒色土中では遺構は確認することができず、III層～IV層面に黒っぽい土（II層）が詰まって穴や溝が検出できた。遺構面（縄文後・晩期）は標高25.3～25.5m。D区でほぼ水平で

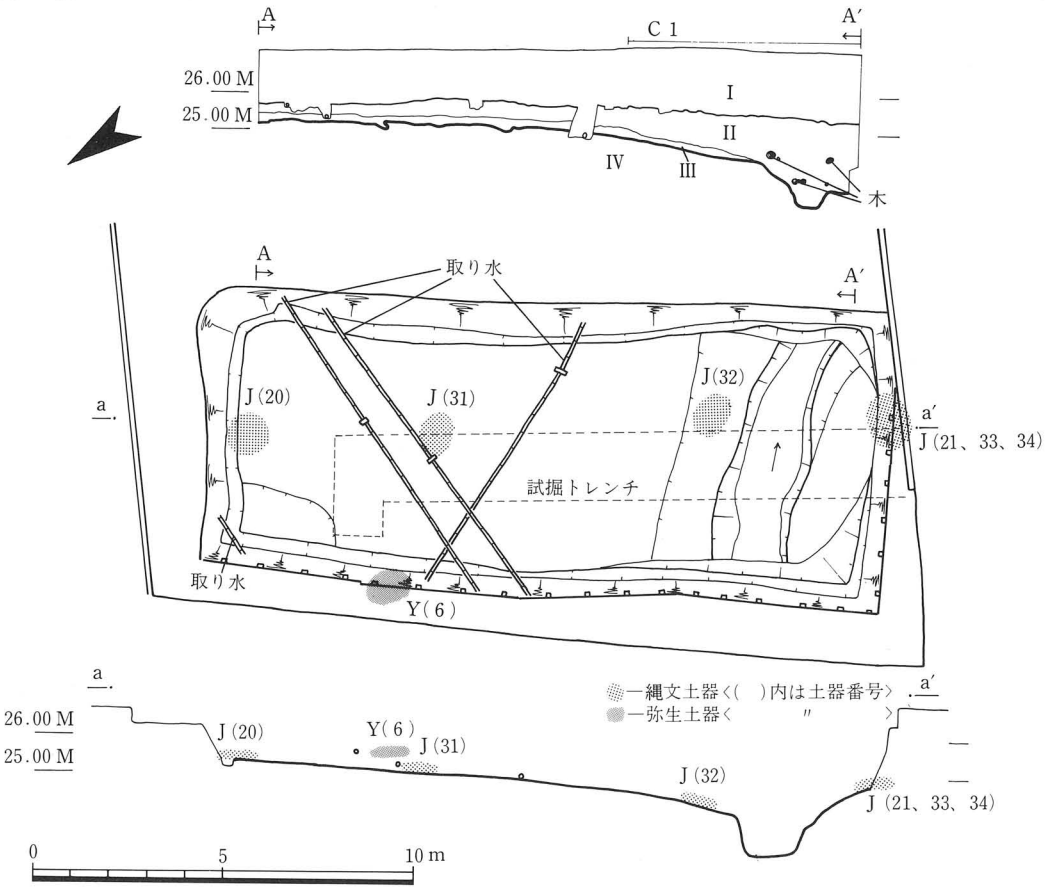


第 12 図　C・D区土層断面（1／50）

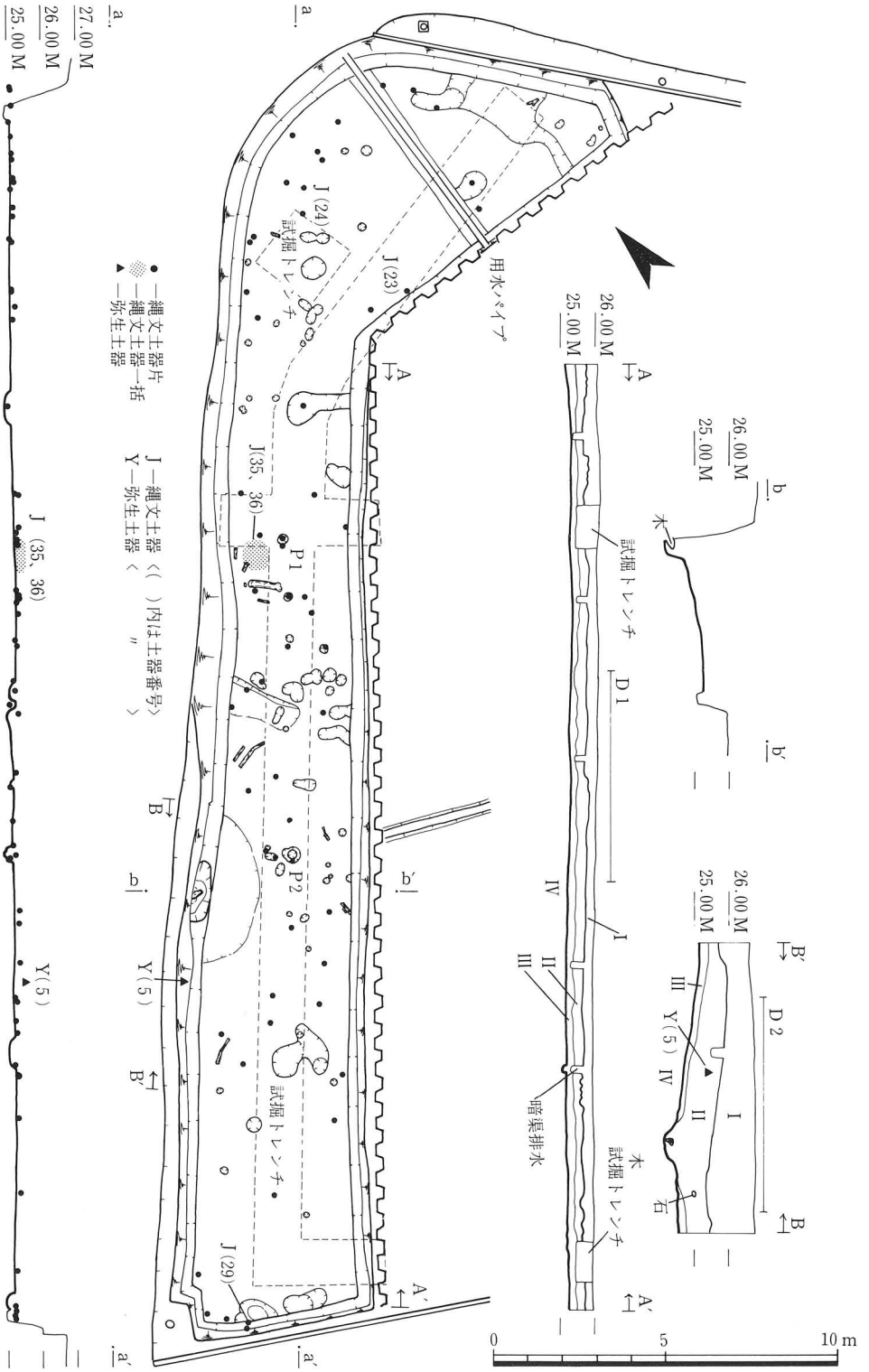
あるがC区でやや低くなる。なお、使用目的が明確な人工の遺構（焼土痕、柱穴など）はなく、住居が営まれたかどうか、遺跡の性格・位置づけはかなり困難である。

D区；不定形の浅い落ち込みや小穴が多数検出できた。一部の小穴からは土器が出土したものもあり、何らかの手が加えられた痕跡といえなくないものもある（第14図—p1・p2、図版10）が、II層中に包含される木材や植物などの影響の痕とも考えられる。調査区の中ほど西端に、やや深くすり鉢状に落ち込む穴があり、底部付近には木(根？)とドングリが多くたまっていた。形状・堆積状況からは人工ではなく凹地に淘汰をうけてたまったものと考えおきたい。しかしながら近辺に縄文人の植物食となる堅果類の樹木が繁茂していたであろうことは重要な意味をもとう。

C区；調査区の南半に丘陵側から平野側へ流れる溝が1本検出できた。幅1.5～2m、深さ約1.2mを測り、溝の中位から上位にかけて木材が多くおり重って出土した(図版12)。丘陵から押し流され、あるいは転落したものとみられる。樹種の鑑定によればスダジイ、タモ、ヤマハンノキなどの樹木で、D区同様、近辺にドングリ等の堅果類の雑木林が生えていたことを物語る。なお、調査区内には節通しの竹を木の角材（「テンコ」）で継いだものが4～5本交差している。通称「取り水」と呼ぶ浄水道で、起源はいまだ不明であるが、水道が敷設される昭和30年代頃まで使用されたものである。



第13図　C区平面及び断面（1／200）



第14図　D区平面及び断面（1／200）

C・D区の遺物

縄文時代（後期後葉、晩期後半）、弥生時代（後期）、奈良時代の遺物があるが、主体となるのは縄文時代で、その他の遺物は数量が少ない。

縄文土器（第15～17図）

縄文時代後期後葉（井口III式～八日市新保式）—I群土器、晩期後半（中屋式後半～下野式）—II群土器、どちらにも分けづらいその他の土器—III群土器に分ける。晩期前半（御経塚式～中屋式前半）の土器の主文様となる玉抱き三叉文、入組三叉文、あやくり文、T字文、羊歯状文などの曲線的で装飾豊かなものは皆無なことから、隔絶する期間があったとも考えられる。

I群土器（第15図—1～6・8～10・17、第16図—18・20・29、第17図—31）

鉢類（1～3）　器形を知ることができないが深鉢・鉢・注口土器などの体部片とみられる。文様からは本群中でも古いところにおきたい。1は胴径14cm前後で幅広の沈線がめぐり沈線を分断する文様として下及び横方向から棒状工具で刺突を施す。2はやや太めの沈線にコブを貼り付け上・横の3ケ所から半截竹管状の工具で刺突する。3は2と胎土・焼成・色調がよく似る。RLの縄文地文に2条の沈線がめぐる。

深鉢A（29）　小型平縁の深鉢とみられ、口縁にわずかに窪む幅広の平行沈線がめぐる。

深鉢B（9）　口唇がやや肥厚する波状口縁深鉢。4単位の突起状の波頂部があり、波頂の間にはさらにわずかに高まる波頂部があるものとみられる。突起状の波頂部上は棒状工具で押さえられる。体部にはRLの縄が粗に転がされ、わずかに窪む幅広の沈線がめぐる。突起状の波頂部をもつ様式は呉東地区の滑川市本江広野新遺跡に出土例が多くみられる。

深鉢C（18、8）　山形の波状口縁深鉢。胴頸部が外開きし、屈曲して口縁がやや外反する八日市新保式の代表的器形を呈する。18は口縁及び胴頸部に5条を単位とする沈線が3段にめぐり波頂部下で沈線を楕円形の圧痕で分断する。波頂部内が無文であることから八日市新保式でも古段階か。8も口縁と胴部に沈線がめぐるようであるが、沈線を分断する文様及び波頂部内は不明である。しかしながら口縁にめぐる沈線は波頂部付近で間隔が広がるようにも観察できる。両者とも内外面よく研磨される。

浅鉢（4、5・20、6）　体部から丸い肩をもちつつ内屈するもの（20）、屈曲して直立するもの（4）がある。5・20は同一個体である。口縁にLRの細かい縄を転がし4条の直線と1条の破線を沈線でめぐらせる。沈線間には6単位とみられる円垂形の刺突が上下に2個づつ施される。高岡市勝木原遺跡、石川県野々市町御経塚遺跡に類似する出土品があり本群中でも古段階におかれている。4は口唇上端面に沈線を有し、口縁には6条の細い沈線がめぐる。6は体部片とみられ八日市新保式の主文様である連結三叉状文が彫られる。内外面研磨。

粗製深鉢（10、17・31）器面全体にRLの縄を転がす。31は器壁が厚い大型品で底部（17）には凹凸の深い紐状の網代圧痕がのこる。10は器壁、大きさとも31ほど大きくない。口唇上端面にも縄文が施され、口唇内側は指頭状圧痕が連続し波打っている。

II群土器（第15図—12～16、第16図—21・24、第17図—32～36）

深鉢（16・21）口径に比して器高のあまり深くない鉢にちかい器形を呈する。左下がりの浅く細かな条痕を施すが、胴下半底部付近では右下がりとなる。口縁には4条の平行沈線がめぐる。羊歯状文→朱子文（列点文）→平行沈線文の流れで大洞C_2式併行期と考えたい。底部（16）には平たい帯状の網代圧痕がのこる。

蓋（24）　蓋型土器のつまみ部分で、上からみると五角形の星形を呈し、上面は円形に窪ませよく研磨されている。側方は星形の突出する部分を除きＲＬの細かい縄文を施し、頸部くびれに太い沈線を2条ひき縄文を磨り消している。

粗製深鉢（12～15、32～36）　器面全体に条痕文が施される。口縁の形態から分類でき、体部から直に伸びるもの（12、32）、やや内屈ぎみのもの（33）、内屈するもの（34）、「く」の字に外反するもの（13・36、14、35）がある。32の口縁は外側を強くなでるために浅く凹みがめぐり端部は外方へ先細りする。外面には太い条痕が不定方向で施され、内面にも同様の条痕がみられるが、大部分をナデ消している。12は口唇部を内側からの指頭状圧痕で小波状とし、横位の条痕が施される。33は横位ないしは右下がりのやや太い条痕を施す。34は類例をみない器形を呈し、概して器壁が薄く仕上げられている。口縁上半と胴下半は接合不可であるが径・胎土・色調・焼成から同一個体であることはほぼ間違いない。土器製作時に上半と下半を接合した部分ではがれたものとみられ、胴下半は疑口縁状を呈している。口唇部は上方からの指頭状圧痕によって小波状をなし、横位ないし右下がりの条痕を施す。内面一部に条痕の痕跡がある。35は口唇部に斜め横からの指頭状圧痕により鋸歯状の小波状となる。口縁では横位に胴部では縦位にと条痕が変化する。13・36は同一個体、口縁は内側からの指頭状圧痕で小波状となり凹部にハの字状の刻みを施す。太い条痕が横位に施される。底部（15）には葉状の圧痕がのこる。14は小型品で胎土には粗い砂粒を多く含み、縦に条痕が施される。なお35・36はＤ区、21・33・34はＣ区のひとかたまり一括の遺物である。（第13・14図）

Ⅲ群土器（第15図―７・11、第16図―19、25～28、30）

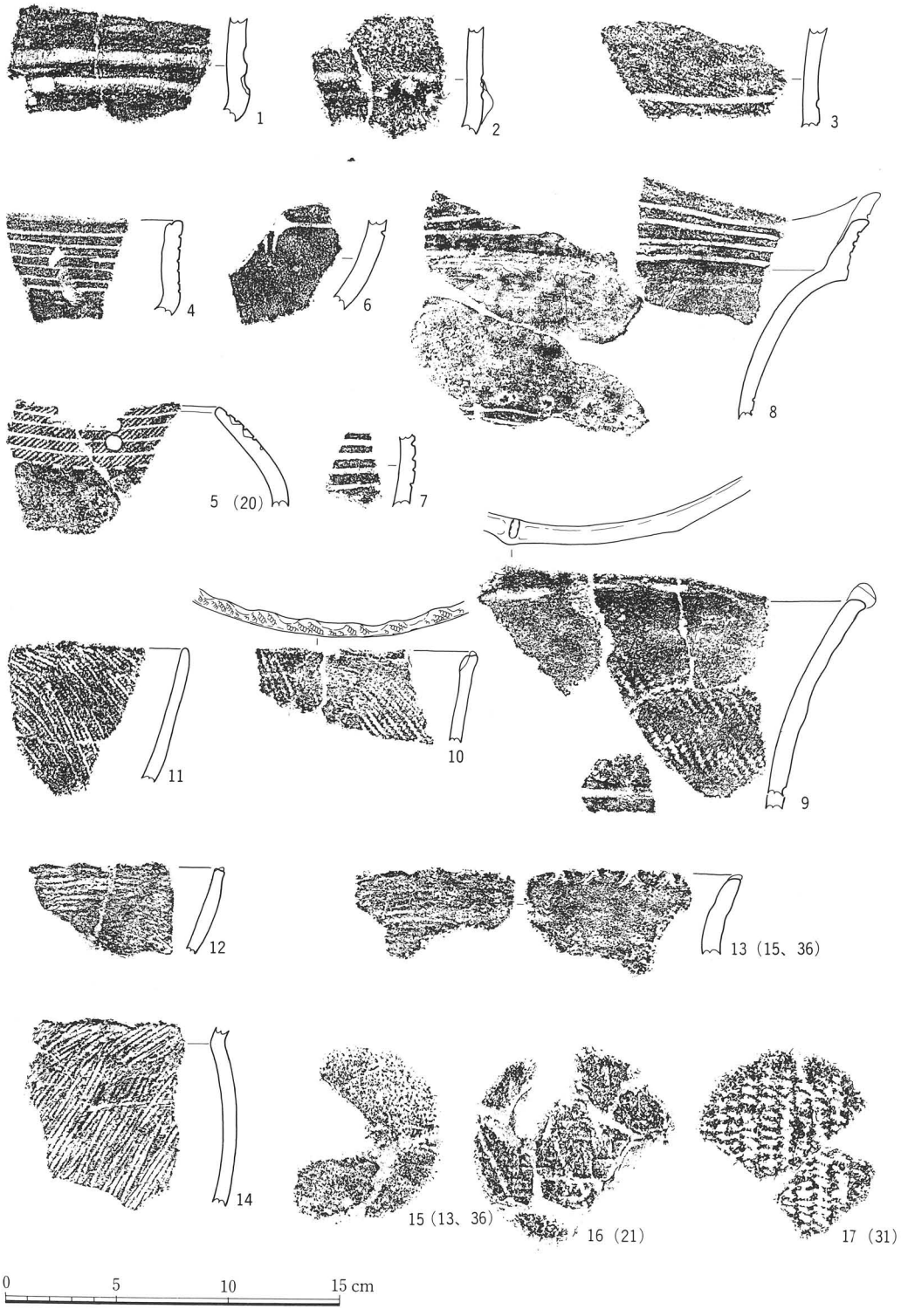
鉢類（７、11、30）　７は器種不明の体部片。内外面研磨され5条の平行沈線が彫られる。11は粗製深鉢とみられるが、ＲＬの縄文原体にＲの縄を左巻きに巻き込む縄巻縄文が施される。30は斜外方へ直に伸び、端部は四角く角ばる。ＲＬの縄を転がし口縁に2条の沈線がめぐる。

浅鉢（19）　内屈する無文の浅鉢。器壁はやや厚く内外面よく研磨される。口縁と体部は接合不可であるが器形は20と似る。

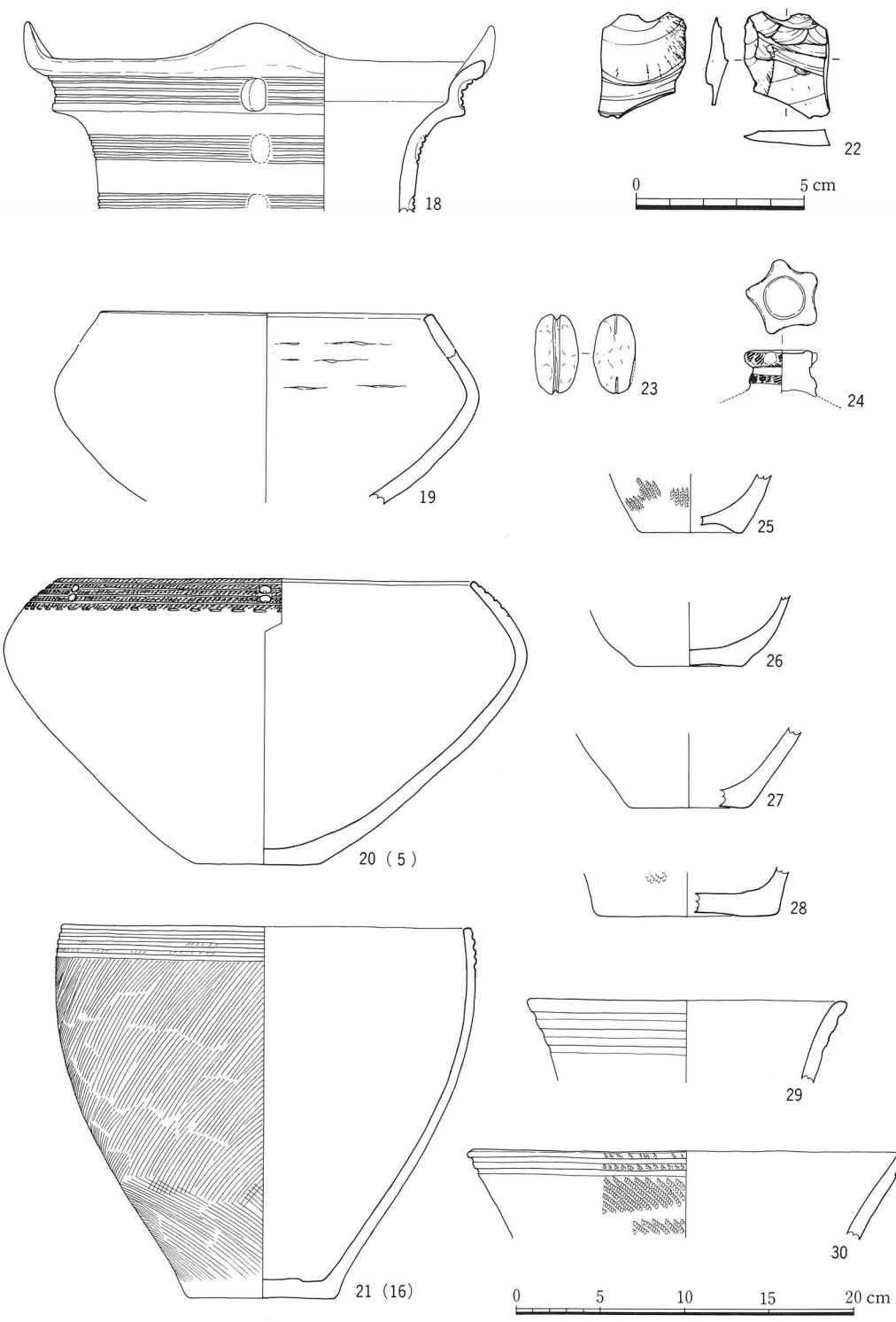
底部（25、26、27、28）　斜上方へ伸びるもの（25、27）、直立に近く立ち上がるもの（28）丸みをおびて立ち上がるもの（26）がある。25は上げ底で外面に縄文施文。26は内外面よく研磨される。27は磨滅が激しいが胎土、焼成、色調が35とよく似る。28はわずかに縄文が認められる。

土製品及び石器（第16図―22、23）

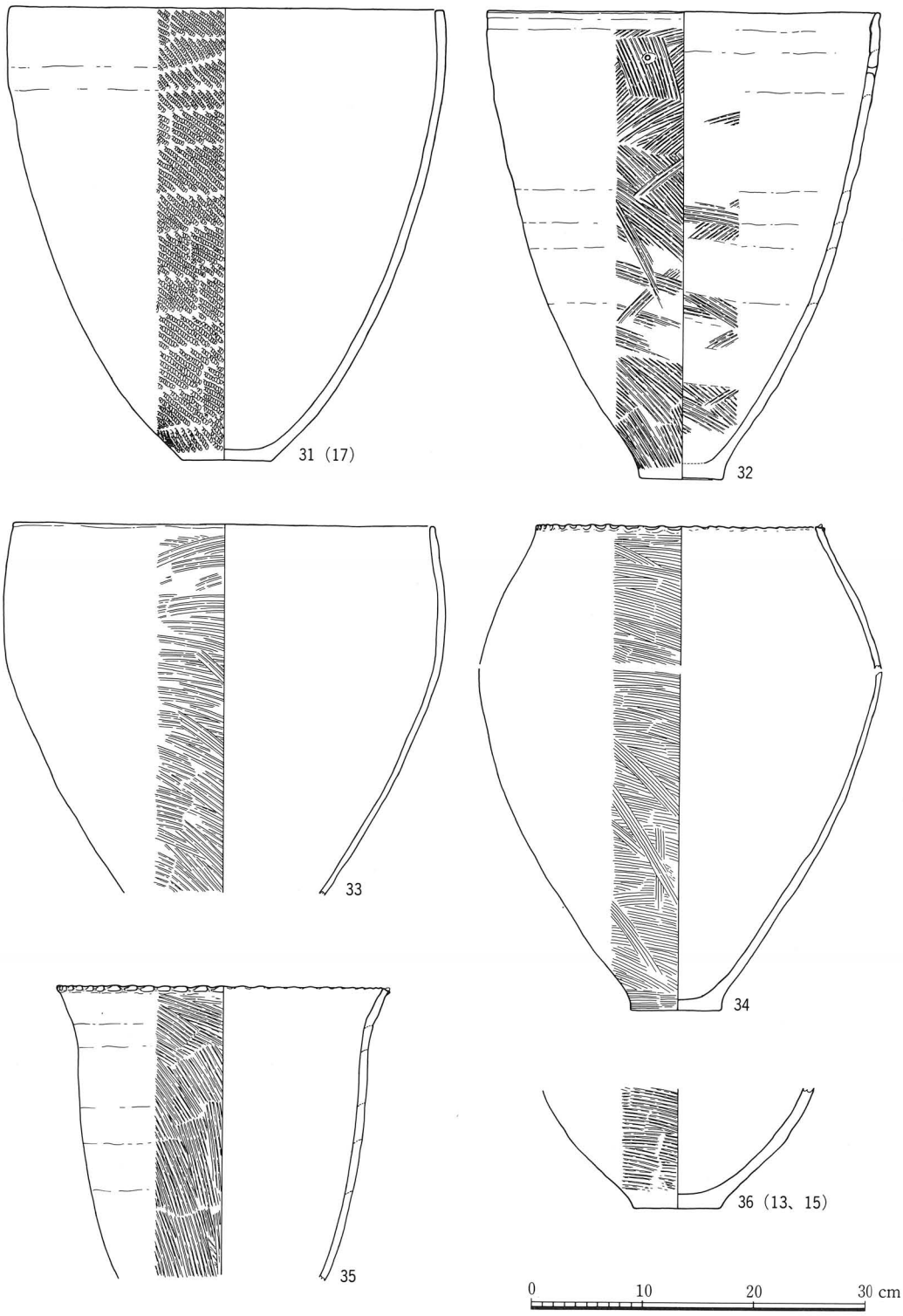
土錘（23）　柱状の楕円形を呈し、深い沈線の溝で縦割りに2分する。両端にはさらに溝と直交する短線がひかれるが、片面のみで反対面は無文である。表面には手ずくねの指頭痕がの



第15図　C・D区出土縄文土器拓影（1／3）



第16図　C・D区出土縄文土器・石器（1／4、1／2）



第17図　C・D区出土粗製縄文土器（1／6）

こる。縄文晩期か。

石器（22）　頁岩製の横長剥片。表面右及び左下を欠損。上半は数回にわたる打撃痕がみられ、ようやく剥がされたもののようである。

弥生時代以降の遺物（第18図）

1・2は器台受部とみられる。1は直線的に外方へ広がったのち、明瞭な段をなして屈曲し、大きく外反して口縁部に至る。段から上には6条の擬凹線が確認できる。調整は外面に横方向内面に縦方向のヘラミガキを行なう。内外面褐色、断面黒灰色を呈し、胎土に大きめの砂粒が若干まじる。2は口縁接合部で剥離している。内外面とも縦方向のヘラミガキを行なっている。直立する口縁部に擬凹線が2条残る。色調は黄褐色～暗褐色、胎土に砂粒を若干含む。

3は壺口縁と考えられる。頸部から外方へのび、直立気味にたちあがって口縁にいたる。外面の屈曲点でにぶい稜をなすが、内面では連続的に変化し、端部は丸くおさめる。外面にヨコナデ、内面にヘラケズリ調整を行なっている。焼成は良好で、外面明黄灰色、内面黒色、胎土には砂粒をやや多く含む。口径約13.5cmを測る。

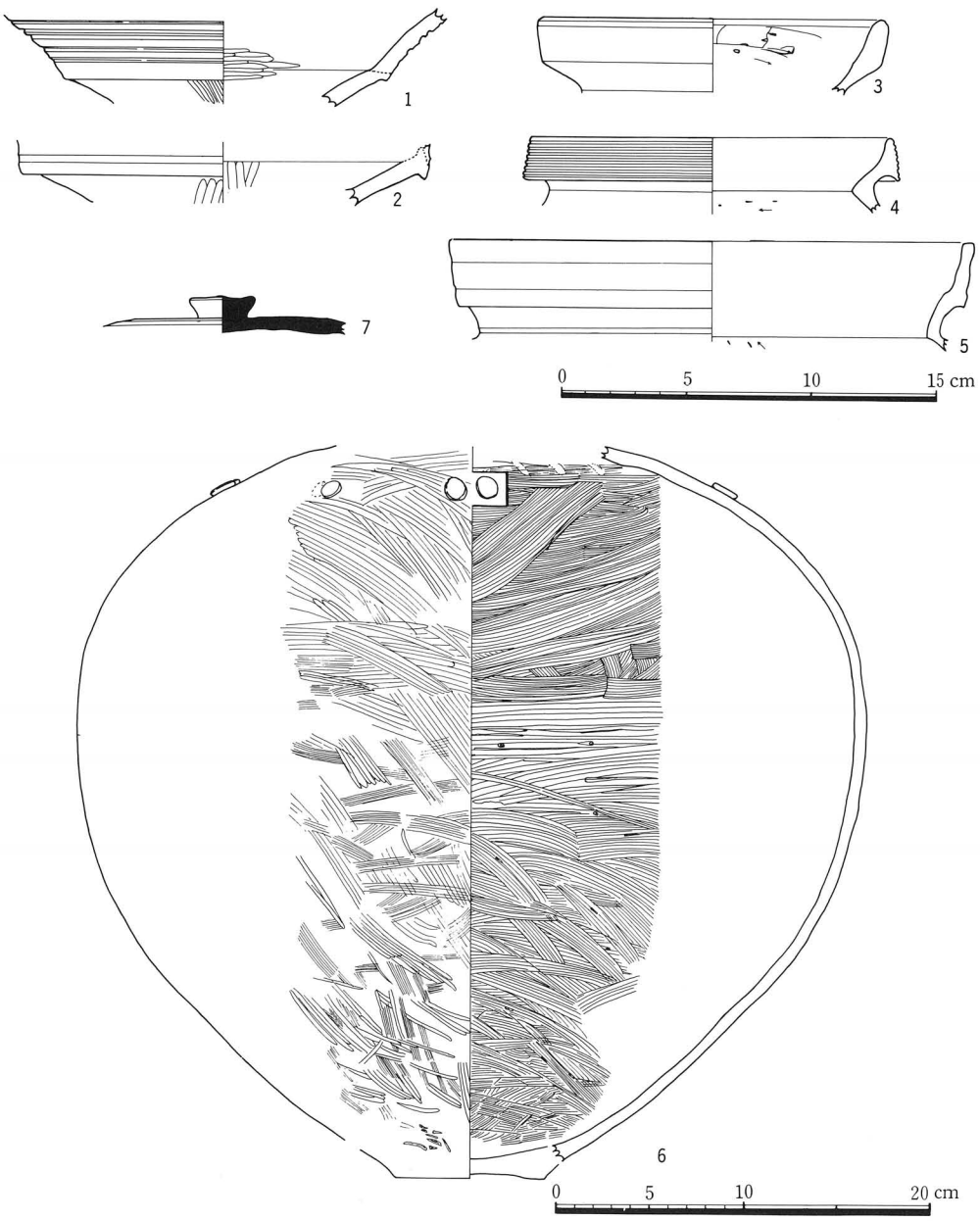
4・5は有段の甕口縁部。4は口縁がやや内傾し、7条の擬凹線をひく。口縁下端部が下方へのびる。内面は端部からなめらかに下がり、体部との境で強い稜をなす。体部内面をヘラケズリする。暗黄灰色を呈し外面にはススが付着している。胎土に砂粒を多く含む。口径14.5cm。5は口唇部に平坦面をもち、擬凹線はひかれない。頸部外面は強くヨコナデし、口縁下端でシャープな稜をなし、内面の頸部と体部の境は明瞭で稜をもつ。4同様体部内面にヘラケズリを行なっている。色調は黒灰色～黄灰色で、胎土には多くの砂粒を含み、外面には厚くススがついている。口径は21cm程度となろう。

6は大型の壺である。胴の張りは強く、最大径は中位やや上部にあって約40cmを測る。幅と高さの比はほぼ1：1と推定され、肩部は2個1単位の円形浮文8単位（7単位となる可能性もある）で飾られる。器肉は均一で7～8mmの厚さを保つ。内面全体を細かなハケで調整するが中央部では条痕風に粗いものとなり、外面はハケのちヘラミガキを行なう。最大径のあたりでは、横方向にみがいている。これは、ミガキの切りあいがはっきりしないのであるが、上部と下部を縦方向にみがいたのち、上下の接点となる位置を横にみがいて仕上げたためと思われ、丁寧な調整を行なっているといえる。色調は明黄灰色～褐色、黒色と部分によって大きく異り胎土にはやや多くの砂粒が含まれる。2・6がC区、1・3～5はD区から出土した。

弥生後期の土器は上市町江上A遺跡で大量に出土している。その研究成果に照らして雀谷地区出土の土器の時期を考えてみる。1にみられる擬凹線は後II期から出現するとされる。2の口縁端が下方へのびるものはI～II期に例がある。6の張りの強い胴部、内外面の丁寧な調整についてはII期の特色としてよいであろう。一方3～6については口縁部の発達具合からみてIII期にあてることができよう（4は若干古い要素をもつ）。従って、これらの土器はおおむね後期II～III期にかかる時期と考えることができる。

7の須恵器杯蓋はD区出土。偏平なつまみをもち、外面ロクロケズリ、内面中央部にナデを施す。焼成は不良で灰白色を呈す。8世紀前半のものであろう。

このほか、D区からは土師器片、砥石も出土しているが所属時期は不明である。



第18図　C・D区出土弥生土器・須恵器実測図1～5・7（1／3）、6（1／4）

Ⅳ　まとめ

1　地形及び自然環境から

石動丘陵沿いに北流する小矢部川と丘陵を割って東流する子撫川は、氾濫・浸食・堆積をくり返しつつ小矢部市街地北方で合流する。桜町遺跡は、この両河川に挟まれる段丘上に立地し遺跡の北及び南東の一部には微高地の自然堤防らしきものもみられる。堤防の形成されたのちの後背地には比較的安定した肥沃な土地がのこされ、水がぬけきらない低地には湿地が形成された。遺跡の南から市街地にかけては、この湿地が広がるものであろうことが今回の調査でも確かめられた。なお、南北へ丘陵沿いに走る道路の拡幅部分を延長400mにわたって試掘をした結果、中央部（A・B区）では丘陵側から東平野側へせり出す微高地（丘陵の延長か。砂礫層の堆積から地滑りしたものか。）がある。その両側には低地が続き、湿地を示す堆積が広がる。桜町遺跡中央部は掘立柱建物がこれまでに100棟近くも検出された律令時代を中心とする一大集落が営まれていた遺跡でもある。南側を湿地で隔てられていたと仮定するなら、交通の便をなす道は、この山際の道（本線＝小矢部・伏木港線）を通るものと考えられ、微高地部分はその中継点ともいえよう。

湿地であったことを示す有機質包含黒色土中には樹木・種子・花粉が良好に保存されており、それぞれ鑑定を依頼した。なお、樹木（表1）・種子（表2）については、発掘中、目についたものを拾い鑑定を依頼したため、数量・分布などについての植生復元には不完全である。しかしながら、樹木ではスダジイ（ドングリ）、種子ではクルミ・コナラ（ドングリ）、花粉（附章）ではクリ・コナラなどの堅果類を実らせる樹木の存在が明らかとなった。丘陵及び湿地縁辺部にはこのような植物食となる森林が育生していたようである。とくに花粉分析からはクリ属花粉の高率出現から、半栽培[29]・積極的保護の問題についての指摘がなされている。この問題については、人工管理、積極的保護がなくても自然条件で堅果類樹木の植生集中はおこりうるとされること[30]もあり、むしろ堅果類樹木の集中する場所へ人間が入り込んだとも解釈される。

湿地の年代については、いまだはっきりとしたことはいえないが、縄文時代後、晩期の遺物が黒色土（II層）下から多く出土し、黒色土中位から弥生時代後期の土器が出土しており、黒色土の主な堆積（湿地）は弥生時代以後のものと考えた。つまり、黒色土中に含まれる堅果類植物食と縄文人とは直接結びつけることはできないものの、縄文時代以降、弥生時代でもこの植生はひきつづいたものと考えておきたい。花粉分析試料はC区溝中より縦に1本だけを採取し、さらに間隔をおいてのサンプルを提出したため、連続的な花粉群集変遷は捉えられがたいとされる。しかしながらも、下層からクリ→コナラ→ハンノキ低湿地林への植生変遷がみられるようである。クリ属花粉集中期には、ヨモギ、シダ類（ゼンマイ）の花粉も少なくないため、該期の溝近辺が湿地形成以前（縄文時代？）の乾地であったかとも推測されうる。湿地の存続は、Ⅰ章で述べた如く、近世初頭まで「葭原」という地名がのこっていたことより、かなり新しい時期まで存在したものとみられる。

表1　桜町遺跡（雀谷地区）出土木樹種識別*

試料名	木樹種	出土地
SD－1	ヤマハンノキ　*Alnus Hirsuta* var. *Sibrica* C. K. SCHN.	C区
SD－2	不明**　*Fraxinus* spp.　（シオジかヤチダモ）	D区
SD－3	アオダモ　*Fraxinus* spp.	C区
SD－4	スダジイ　*Castanopsis cuspidata* SCHOTTKY var. *Sieboldii* NAKAI	C区
SD－5	アオダモ　*Fraxinus* spp.	C区
SD－6	スダジイ　*Castanopsis cuspidata* SCHOTTKY var. *Sieboldii* NAKAI	C区

*富山県木材試験場　飯島泰男、長谷川益夫氏の同定による。
**京大・木材研究所に照会。

表2　桜町遺跡（雀谷地区）出土の種実遺体*

出土植物名	出土部位	形状	数	出土区
クルミ科　Juglandacede オニグルミ　*Juglans ailanthifolia* Carr.	核 核裂片	完形	1	C区
		破損	2	C区
		破片	2	C区
ブナ科　Fagaceae コナラ属　*Quercus* sp.	堅果（果皮）	破損	10	D区
		破片	16	D区
ブナ科（不明）　Fagaceae-indet**	堅果（果皮）	破損	1	D区
		破片	100	D区
カヤツリグサ科　Cyperaceae ホタルイ属　*Scirpus* sp.	種子	破損	1	D区

*　金沢大学大学院理学研究科　吉井亮一氏の同定による。
**　*Quercus* sp. *Castanopsis* sp. と推定されるものを合せて含む。

2　周辺の縄文遺跡群

桜町遺跡は国道8号小矢部バイパス建設に伴う発掘調査によって少しづつ明らかとなりつつあり、今年で7年間を経過した。昭和61年9月～11月には、遺跡の西端（舟岡地区）、丘陵の谷間から谷口にかけて、延長400 m×幅50 m（面積21,400 m²）を対象とし、約500 m²の試掘調査を実施した。その結果、縄文時代(早期後半、前期初頭、中期、後期後半～晩期)、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世と断続的ながらも幅広い時期の遺物が出土した。とくに縄文時代中期後半と後期後半～晩期にかけての遺物量は豊富で廃棄された遺物が集積する部分もみられる。北と南を急傾斜の丘陵に挟まれる谷間のため、土砂の堆積が早く、古い時期の包含層は地下4～5 mに達する部分もある。また、周辺の地質は礫、砂、ローム、粘土といった様々な露頭がみられ、地形変動の起こり易い不安定な地勢といえる。そのため同期の遺物であっても場所によって地下の深さが大きく異なり、現状地形とは予測もつかぬほど起伏の激しい部分もある。おそらくは、支谷から流れる河川が幾度となく流れを変え、ときには地滑りによって塞き止められて沼地ができたり、さらに浸食によって押し流されたり、あるいは人工的に流路を

変えたりといった。早期後半以来、地形環境は刻々と変貌を遂げたものと推察される。遺物包含層は主に黒色泥炭質土層中に包含され、砂礫あるいは粘土層とが互層となる部分もある。遺物とともに樹木・種子(クルミ一人工で割られたものを含む、トチ、クリ)、獣骨なども良好に保存されている。樹木・種子・花粉、^{14}C年代測定、考古地磁気年代測定については現在同定中である。なぜ、このような不安定な場所に人間が入り込まねばならなかったのか、今後の大きな課題である。

また、桜町遺跡を隔てる西丘陵の反対側(子撫川右岸の北向き丘陵尾根)には屋波牧遺跡(第2図・25)が所在する。昭和61年6月～7月に遺跡南端を国道8号小矢部バイパス建設に先立って発掘調査した。その結果、後期初頭(前田式期)の石組炉をもつ住居跡1棟と土器がまとまって入る穴3個が検出できた。遺跡周辺部丘陵にも試掘坑を入れたのであるが、遺跡の立地する尾根だけが礫がちローム層の上に遺物を含む黒ボク層が堆積しており、遺跡の南及び東では遺物はなく古い海性砂層が厚く堆積するものであった。このことは遺跡の立地と地形・自然(植生)環境とが深いかかわりをもつものとして興味深い。

さらに、屋波牧遺跡の北、谷平野を挟んで対峙する丘陵先端部には宮中遺跡(第2図、24)が所在する。縄文時代前期後葉(蜆ケ森式期)の土器が畑地(黒ボク)から採集されている。また屋波牧遺跡の南東約0.4kmには屋波牧南遺跡(第2図・26)が所在する。狭い畑地から条痕文土器片を表採したことから縄文後・晩期の小規模な遺跡ではないかと推定される。縁辺部を国道8号小矢部バイパスが通るため、昭和62年度に、工事対象地を発掘予定である。

これら一連の縄文時代の遺跡群は、径2km以内の近距離で立地し互いに密接な関連をもつことは間違いない。交易、集落の移動、分村併立、母村とキャンプサイトの関係など様々な考え方ができ、当地域における縄文社会を解きほぐす鍵をにぎる遺跡群である。今回調査した桜町遺跡雀谷地区は舟岡地区ととくに密接な関係をもつものとみられ、今後、舟岡地区の調査成果をふまえつつさらに検討を加えていく必要がある。

参 考 文 献

I

1　1967　藤井昭二　『表層地質図、砺波（５万分の１）』

2　1968　藤井昭二　『表層地質図　氷見と高岡西部（５万分の１）』

3　1970　経済企画庁　『土地分類基本調査、５万分の１「石動」』

4　1971　小矢部市史編集委員会　『小矢部市史』上巻　小矢部市

5　1986　富山地学会編　『富山県の地形・地質』　富山県生活環境部

II

6　1980　小矢部市埋蔵文化財分布調査団　『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報（1979年度）』小矢部市教育委員会

7　1980　伊藤隆三　『桜町遺跡発掘調査概報』　小矢部市教育委員会

8　1982　伊藤隆三・安念幹倫　『桜町遺跡（古苗代・鷲場地区）』　小矢部市教育委員会

9　1984　伊藤隆三・高木場万里　『桜町遺跡―城山都市下水路新設工事に伴う産田地区の調査）』　小矢部市教育委員会

10　1985　安念幹倫・高木場万里・山森伸正・林浩明　『桜町遺跡―産田地区発掘調査概報―』　小矢部市教育委員会

III－１

11　1975　橋本正・岸本雅敏　『入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要』（３）　入善町教育委員会

12　1979　斎藤隆　「Ⅳ・２、Ｂ地区」『野沢遺跡』Ⅰ　大沢野町教育委員会

13　1983　吉岡康暢　「第二章・奈良平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』　松任市教育委員会・石川考古学研究会

III－２

14　1967　吉岡康暢　「北陸における土師器の編年」『考古学ジャーナル』６

15　1974　藤田富士夫・橋本正春　『富山市境野新遺跡発掘調査報告書』　富山市教育委員会

16　1978　岸本雅敏・山本正敏・池野正男・松本幸治　『小矢部市竹倉島遺跡発掘調査概報』富山県教育委員会

17　1982　久々忠義　「辻坂の上遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告一立山町土器・石器編一』富山県教育委員会

18　1984　狩野睦・酒井重洋・橋本正春　「若宮Ｂ遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告一立山町木製品・総括編一』富山県教育委員会

III－３

19　1965　高堀勝喜　『日本の考古学II　縄文時代』「北陸」河出書房新社

20　1967　小島俊彰・出崎政子　『勝木原遺跡Ⅰ』　富山県立高岡工芸高校地歴クラブ

21　1979　小島俊彰　「本江遺跡」『滑川市史考古資料編』　滑川市

22　1980　橋本正・酒井重洋・久々忠義　『富山県井口村井口遺跡』　井口村教育委員会

23　1982　安孫子昭二　『村山市史別巻一　原始・古代編』　村山市史編さん委員会

24　1983　西野秀和　『上田うまばち遺跡』　押水町教育委員会

25　1983　高堀勝喜　『野々市町御経塚遺跡』　野々市町教育委員会

26　1986　南久和　『金沢市新保チカモリ遺跡　第４次発掘調査兼土器編』　金沢市教育委員会

27　1987　酒井重洋　「井口村井口遺跡の縄文晩期の土器」『大境10号』　富山考古学会

28　1984　久々忠義　「II総括　C　江上弥生遺跡群について」『北陸自動車道遺跡調査報告一上市町木製品・総括編一』　上市町教育委員会

IV

29　1982　安田喜憲　「古環境をめぐる自然科学的調査　第２節　花粉分析」『小泉遺跡』　大門町教育委員会

30　1986　吉井亮一　「富山県南太閤山Ⅰ遺跡の種実遺体（２）」『七美・大閤山・高岡線内遺跡群　発掘調査概要（４）』　富山県教育委員会

附　桜町遺跡(雀谷地区)花粉分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

1　調査地および試料

桜町遺跡雀谷地区は、小矢部市街地の北東約1.8kmの西中野、桜町地内にあり、東方約500mに小矢部川、北方約700mに子撫川が流下している。西方約0.5kmには標高約200m弱の丘陵が北東から南西に続いている。

遺跡内には砂・シルト・泥炭などが埋積している。花粉分析試料は、調査区東壁断面の⑬・⑧・③・①の各層から採取されたａ・ｂ・ｃ・ｄ試料の4点である。各試料の岩質、採取位置については図1に示した。

2　分析方法

花粉・胞子化石の抽出方法は、以下に示す方法で行なった。

1）秤量

試料をポリエチレン製ビーカーに各2～5ｇ秤量する。

2）ＨＦ（フッ化水素）処理

本処理は、試料中のケイ酸質の溶解と、試料の泥化を目的とする。

①試料に48%ＨＦを20ml加えて、振とう式ホットプレートで60分間加熱攪拌する。

②処理後、試料を50mlの遠沈管に移しかえ、遠心分離(1,500回転)し、上澄み液を捨てる。

③蒸留水を加え、攪拌し、遠心分離を行ない上澄液を捨て処理液を取り除く（以下、水洗いとする)。この作業を2回行なう。

3）重液分離

本処理は、試料中の花粉、胞子化石などの有機物を、比重の違いを利用して分離する。

花粉・胞子化石の比重は1.3～1.8以下で、鉱物質は2以上である。

①$ZnBr_2$（臭化亜鉛）を10%塩酸（HCl）に溶かし、比重を2.2に調整する。その重液を、ＨＦ処理の終った残渣に20ml加えて、よく攪拌する。

②遠心分離器により、800回転で15分間、続けて2,500回転で10分間遠心分離する。

③遠心分離後の浮上物を別の遠沈管に移し、蒸留水を加え比重を下げ、遠心分離する。

④水洗を3回行なう。

4）篩別

試料中に含まれる#250μ以上の有機物片の除去を目的とする。

①試料を#250μの篩にかけ、一昼夜沈降させる。

5）アセトリシス処理

エルドマン（1934）が考案した方法で、植物遺体中のセルロースを加水分解する。

①CH_3COOH（氷酢酸）10 ml を加えよく攪拌し、残渣の脱水を行なう。遠心分離する。上澄み液を捨てる。

②残渣に、$(CH_3CO)_2O$（無水酢酸）9 部に H_2So_4（濃硫酸）1 部を混入した醋化液を 10 ml 加え、ウォーターバスで 5 分間湯せんする。冷却後遠心分離し、上澄液を捨てる。

③水洗を 3 回行なう。

6）KOH 処理

腐植酸の溶解を目的とする。

① 10%KOH（水酸化カリウム）を 10 ml 加え、ウオーターバスで 15 分間湯せんする。

②水洗を 3 回行なう。

7）封入

分析処理後の残渣をマイクロピペットで花粉、胞子数を調整し、グリセリンゼリーで封入し、検鏡した（グリセリンゼリーは、屈折率が 1.43 で、北米やわが国でよく使われる封入剤である）。

8）検鏡および結果の表示

検鏡においてはプレパラート全面を走査し、その間に出現したすべての種類（Taxa）及びその個数を計数した。その結果は、表 1 に示した。表 1 をもとに樹木花粉、草本花粉、不明花粉、シダ類胞子の構成比（百分率）、各花粉、胞子化石の出現率を算出し、図 2 を作製した。出現率は、樹木花粉が樹木花粉の合計、草本花粉とシダ類胞子が不明花粉を除く花粉、胞子の合計を基数とした百分率である。

3　結果及び考察

分析の結果、全般的に花粉、胞子化石の産出が良好であり、樹木花粉 32 種類、草本花粉 25 種類、シダ類胞子 2 種類が検出された。各試料とも樹木花粉が 70%前後、草本花粉が 20～30%を占め、出現した花粉・胞子化石の大部分を占めている。一方、花粉・胞子化石の組成は試料によって異なるが、試料採取の間隔が約 50 cm 前後開いているので、連続的な花粉群集の変遷と捉えられるかどうか明言できない。このような状況であるので、局地花粉群集帯は設定せず、各試料ごとの特徴を下位より述べることにする。

○ a 試料（⑬層）

樹木花粉はクリ属が高率に出現し、コナラ亜属、スギ属、アカガシ亜属、トチノキ属などを比較的高率に伴なう。草本花粉はイネ科が高率に出現し、タデ属、ヨモギ属、セリ科などを伴なう。低率ながら沼沢地に生育するガマ属とゴキヅル属が出現する。

○ b 試料（⑧層）

樹木花粉はクリ属が非常に高い出現率を示し、スギ属、トチノキ属、コナラ亜属を比較的高に伴なう。その他に、アカガシ亜属、エノキ属—ムクノキ属、ハンノキ属などが低率に出現する。草本花粉はイネ科とヨモギ属が主に出現し、低率ながらガマ属やゴキズル属などを伴なう。

シダ類胞子はゼンマイ属が僅かにみられる。

○ｃ試料（③属）

樹木花粉はコナラ亜属、ハンノキ属、スギ属が高率に出現し、クリ属、トチノキ属、アカガシ亜属、ブナ属、クルミ属などを伴なう。草本花粉はイネ科が高率に出現し、ゴキヅル属を比較的良好に伴なう。その他に水生植物のミズアオイ属が僅かに出現する。シダ類胞子はゼンマイ属が僅かに出現する。

○ｄ試料（①試料）

樹木花粉はハンノキ属とスギ属が高率に出現し、ブナ属、アカガシ亜属、クリ属、トチノキ属などを良好に伴なう。草本花粉はイネ属が高率に出現し、水生植物のサジオモダカ属やミズアオイ属を低率で伴なう。

比較的現地性の高い草本花粉の出現をみると、全試料において水生植物が出現しており、水生植物が生育可能な水域の環境が推定される。水生植物の種類は、ａ・ｂ試料において、ガマ属とゴキズル属、ｃ試料においてミズアオイ属とゴキズル属、ｄ試料においてサジオモダカ属とミズアオイ属というように堆積層によって差異が認められる。ガマ属は多年生草本で、水が多少流れていても生育するのに対して、ミズアオイ属は水田や沼のように水の流れのない安定した水域に生育する。このことから、ａ・ｂ試料の堆積当時は、比較的流水影響を受けた水域環境が存在したことが示唆される。一方、ｃ・ｄ試料の堆積当時になると、流水の影響を受けない沼や池のような安定した水域環境になったと考えられる。このような水域の変化は、下部のａ・ｂ試料前後の堆積物が砂混りまたは砂であるのに対してｃ・ｄ試料では泥炭が厚く堆積しており、岩質の違いからもうかがえる。今後珪藻分析等を実施すれば、水域環境の変化について、さらに明確な情報が得られるのであろう。また、ｃ・ｄ試料では樹木花粉のハンノキ属が高率に出現していることから、ハンノキ低湿地林が発達したと考えられる。

一方、樹木花粉はａ・ｂ試料においてクリ属が高率に出現し、コナラ亜属、スギ属、トチノキ属などを比較的高率に伴なっている。クリ属の高率な出現傾向については、小泉遺跡（安田、1984）においても認められ、縄文時代前期におけるクリの半栽培が指摘されたことがある。このような傾向は、さらに東北の亀ケ岡遺跡（堀、1959、新戸部、1973、那須、1980）、関東の武蔵野公園低湿地遺跡（パリノ・サーヴェイ株式会社、1984）や北本低地（伊藤ほか、1986）その他においても認められている。各調査地の堆積物の時代性は地域によって異なり、縄文時代早期から後晩期にわたる。本試料の時代性はまだ確認されていないので、安易に上記の事例と比較できないが、時代的には縄文時代である可能性も大きい（堆積物の時代性については ^{14}C 年代測定・遺物などで確認する必要がある）。

ともあれ上記のように、ａ・ｂ試料の堆積時の台地上またはその斜面には、クリ林がナラ類、カシ類、スギなどを混えて存在していたと考えられる。

ｃ試料の堆積当時になると、台地上およびその斜面はナラ類とスギからなる林になり、ｄ試

料の堆積当時では、スギがさらに拡大するようになったと考えられる。スギの分布拡大については、産田地区の報告（パリノ・サーヴエイ株式会社、1986年3月提出）に述べているが、ここでも若干述べておく。最終氷期最盛期、日本海側の地域では、若狭湾地域へスギが逃避していたが（富山湾沿岸地域でも、当時スギの生育に必要な雨量があったとすれば、逃避地としての可能性が強い）、晩氷期の気候の温暖化により、分布拡大し始め北上・南西下した。北上したスギは野尻湖周辺に5,500年前頃到着したとみられている（塚田、1980）。これに従えば、本地域へのスギの到着は野尻湖よりも早い時期である。今回は、各試料の堆積年代は不明であるが、d試料の堆積当時すでにスギが到着していたことは明らかである。

以上、本遺跡の分析試料はクリの半栽培や積極的保護やスギの分布時期など、重要な問題を抱えているが、今後堆積物の時代について明らかにすることが望まれている。

引　用　文　献

安田喜憲（1984）　花粉分析、大門町埋蔵文化財報告第5集、小泉遺跡

堀　正一（1959）　青森県亀ケ岡遺跡の花粉分析、亀ケ岡遺跡、三田史学会

新戸部　隆（1973）　花粉分析について、亀ケ岡遺跡発掘調査報告書

那須孝悌・山内　文（1980）　縄文後期、晩期低湿地遺跡における古植生の復元、自然化学の手法による遺跡、古文化財の研究。

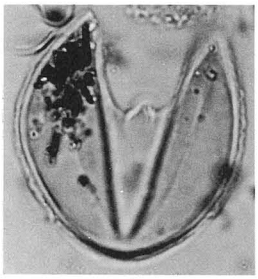
パリノ・サーヴェイ株式会社（1984）　武蔵野公園低湿地遺跡の試料分析、同定結果、武蔵野公園低湿地遺跡、武蔵野公園泥炭層遺跡調査会

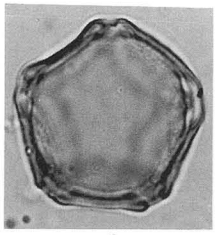
伊藤良永・大嶋秀明、吉川昌伸、矢作健二、辻本裕也（1986）　北本低地の古環境変遷、日本第四紀学会講演要旨集、16、p. 72～73.

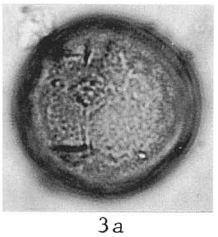
パリノ・サーヴェイ株式会社　桜町遺跡（産田・中出地区）試料花粉分析報告、1986年3月小矢部市教育委員会へ提出。

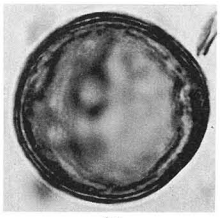
塚田松雄（1980）　杉の歴史：過去一万五千年間、科学50、9、p. 538～546.

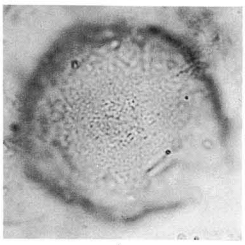
図版　1

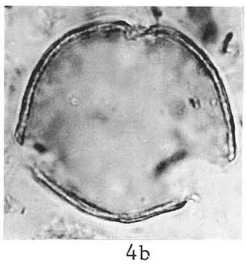

1

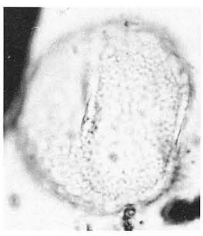

2

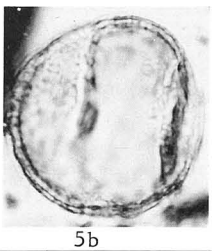

3a

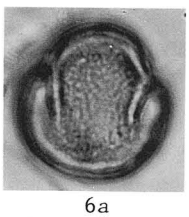

3b

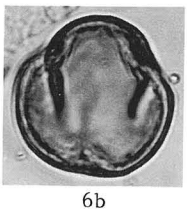

4a


4b


5a

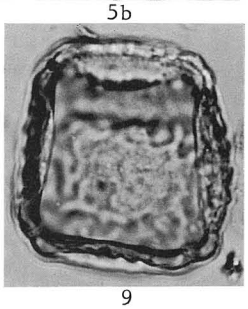

5b

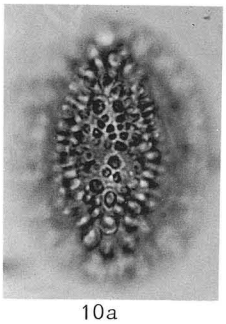

6a

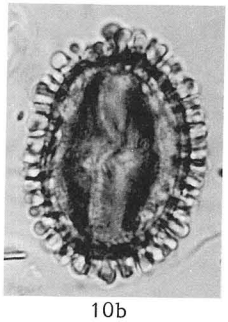

6b

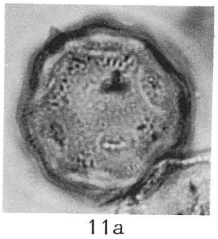
7

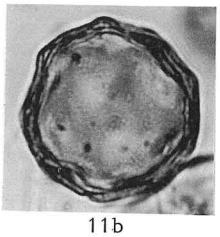
8


9

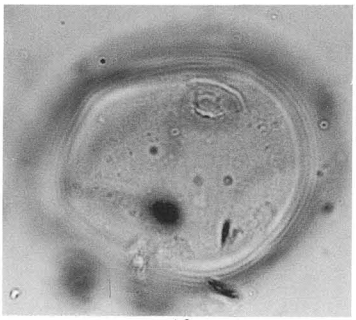

10a

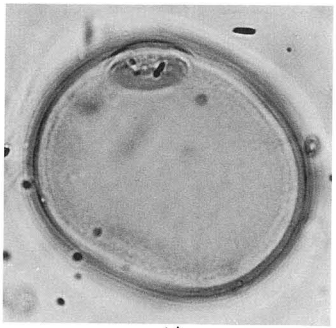

10b


11a

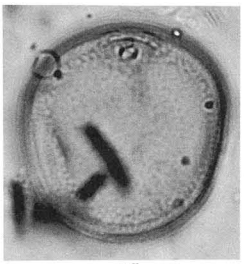

11b

12

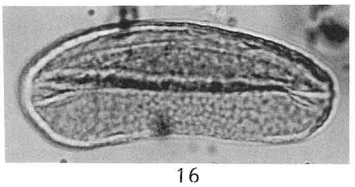

13


14

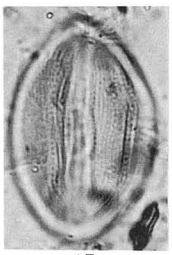
図版　2



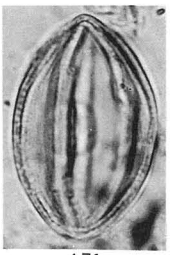
15



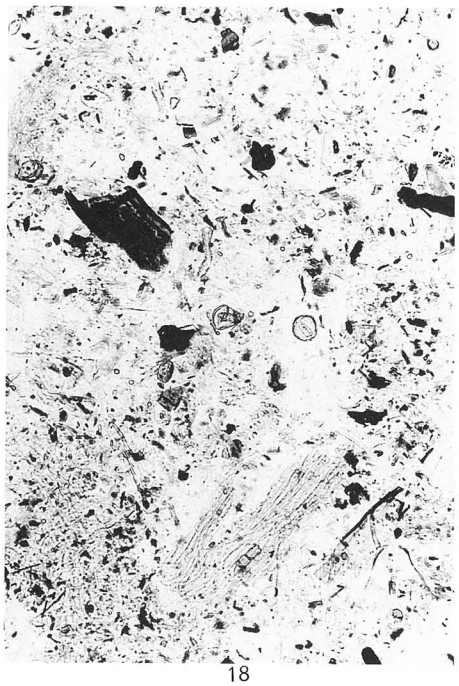
16



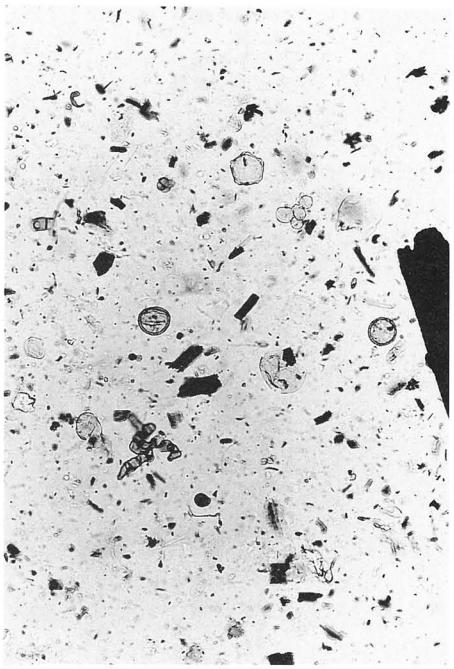
17a



17b



18



19

50μ(No.1-17b)

50μ(No.18-19)

写真番号	化石名	試料番号
1	スギ属	d
2	ハンノキ属	d
3 a	ブナ属	d
3 b	ブナ属	d
4 a	コナラ亜属	c
4 b	コナラ亜属	c
5 a	コナラ亜属	c
5 b	コナラ亜属	c
6 a	アカガシ亜属	d
6 b	アカガシ亜属	d
7	アカガシ亜属	d
8	クリ属	b
9	ケヤキ属	d
10 a	モチノキ属	d
10 b	モチノキ属	d
11 a	サジオモダカ属	d
11 b	サジオモダカ属	d
12	イネ科	d
13	イネ科	d
14	イネ科	d
15	イネ科	d
16	ミズアオイ属	d
17 a	ゴキヅル属	c
17 b	ゴキヅル属	c
18	状況写真	c
19	状況写真	d

桜町遺跡（雀谷地区）試料花粉分析結果

試料番号	d	c	b	a
複維管束亜属（ニヨウマツ亜属）	—	—	4	1
マツ属	1	1	—	—
コウヤマキ属	1	1	—	—
スギ属	58	35	28	21
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	3	9	1	4
ヤナギ属	—	1	—	—
サワグルミ属	—	—	—	1
クルミ属	3	4	3	2
クマシデ属—アサダ属	11	2	2	8
カバノキ属	4	1	—	3
ハンノキ属	135	46	9	11
ブナ属	20	4	4	3
コナラ亜属	17	71	41	35
アカガシ亜属	21	8	13	14
クリ属	19	14	249	67
シイノキ属	—	4	2	2
ニレ属—ケヤキ属	12	2	—	2
エノキ属—ムクノキ属	5	6	4	4
カツラ属	1	—	—	1
マンサク属	1	—	—	—
コクサギ属	—	—	1	—
キハダ属	—	2	—	1
アカメガシワ属	—	—	1	—
ウルシ属	—	1	—	—
モチノキ属	6	—	—	—
カエデ属	—	—	—	1
トチノキ属	22	17	28	19
ツタ属	—	1	1	—
ウコギ科	1	1	—	1
エゴノキ属	1	1	—	—
トネリコ属	1	12	4	—
ガマズミ属	—	—	—	1
ガマ属	—	—	1	1
サジオモダカ属	3	—	—	—
イネ科	82	49	20	50
カヤツリグサ科	12	2	4	2
イボクサ属	1	—	—	—
ミズアオイ属	8	1	—	—
ユリ科	1	—	—	—
クワ科	4	2	1	3
サナエタデ節—ウナギツカミ節	3	—	2	1
タデ属	—	—	1	16
ナデシコ科	1	—	—	—
カラマツソウ属	—	—	—	1
アブラナ科	2	—	—	—
バラ科	2	—	1	1
マメ科	2	2	2	2
ツリフネソウ属	—	3	7	—
セリ科	2	2	5	4
ネナシカズラ属	—	—	—	2
シソ科	1	—	—	—
オオバコ属	—	—	1	—
ゴキヅル属	—	13	2	3
ホタルブクロ属	—	—	1	—
ヨモギ属	12	2	31	10
キク亜科	1	1	4	1
タンポポ亜科	—	—	—	1
不明花粉	12	11	10	3
ゼンマイ属	—	2	4	—
他のシダ類胞子	3	6	48	2
樹木花粉	343	244	395	202
草本花粉	137	77	83	98
不明花粉	12	11	10	3
シダ類胞子	3	8	52	2
総花粉・胞子	495	340	540	305

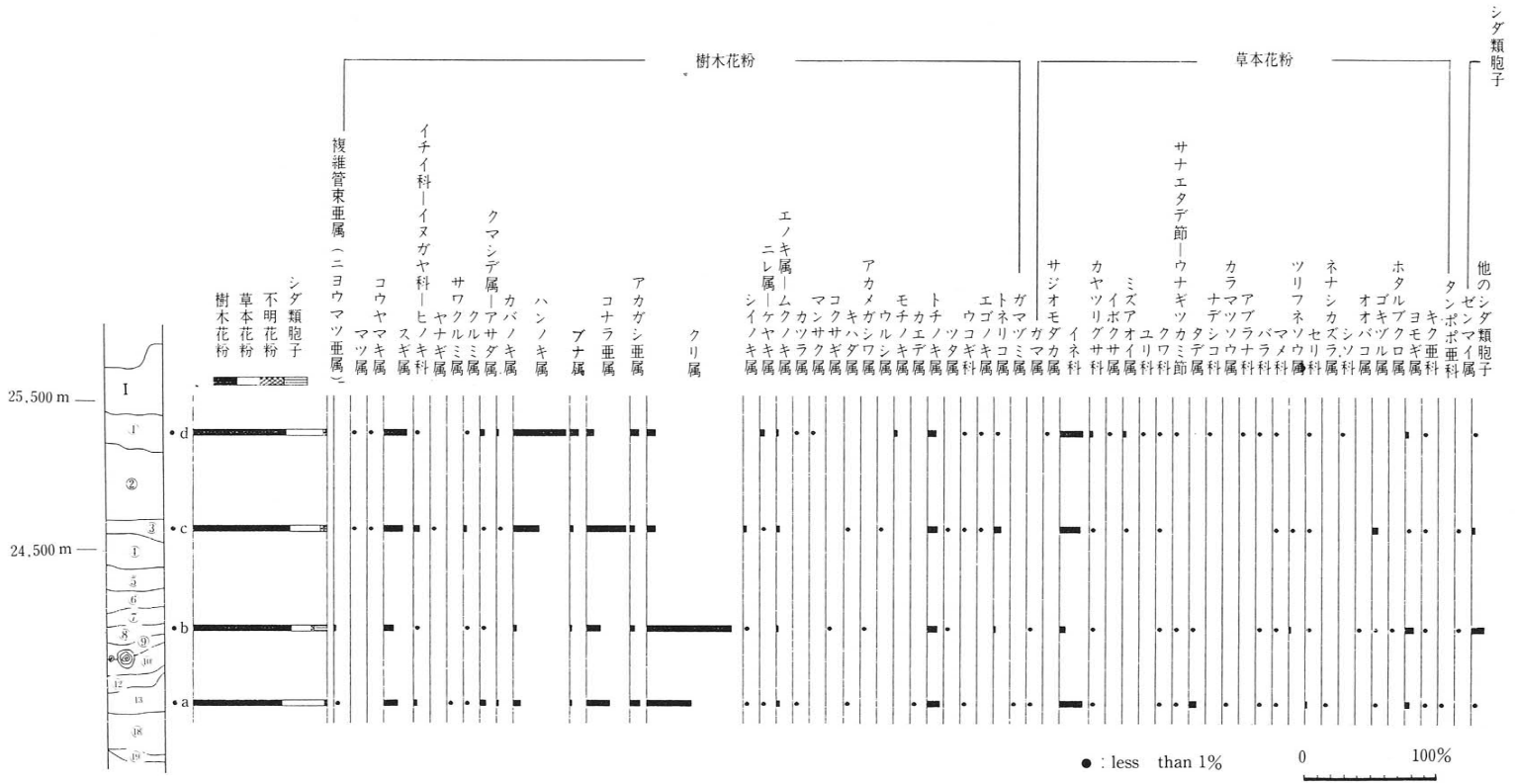
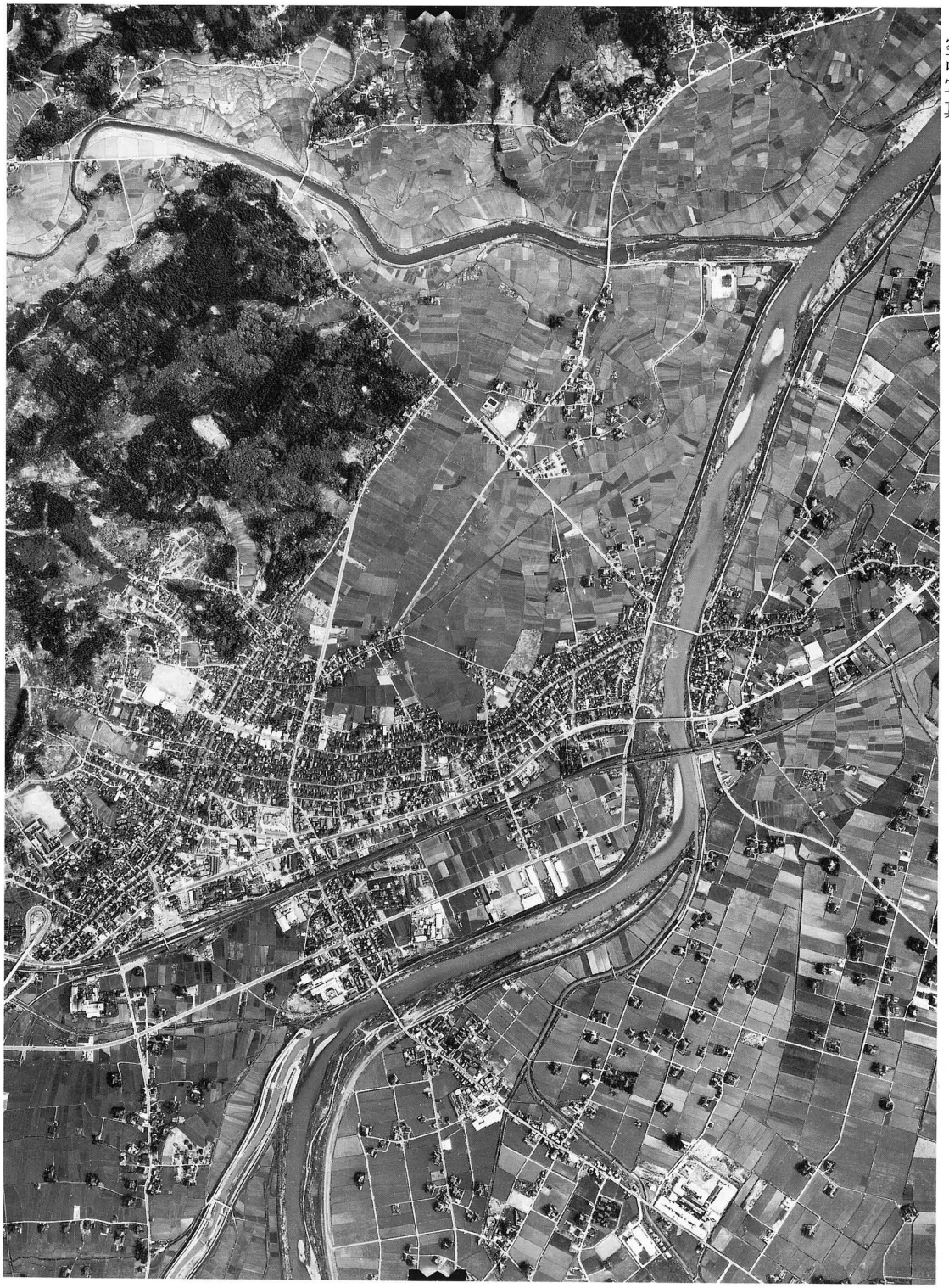


図１　桜町遺跡（雀谷地区）試料花粉化石群集変遷

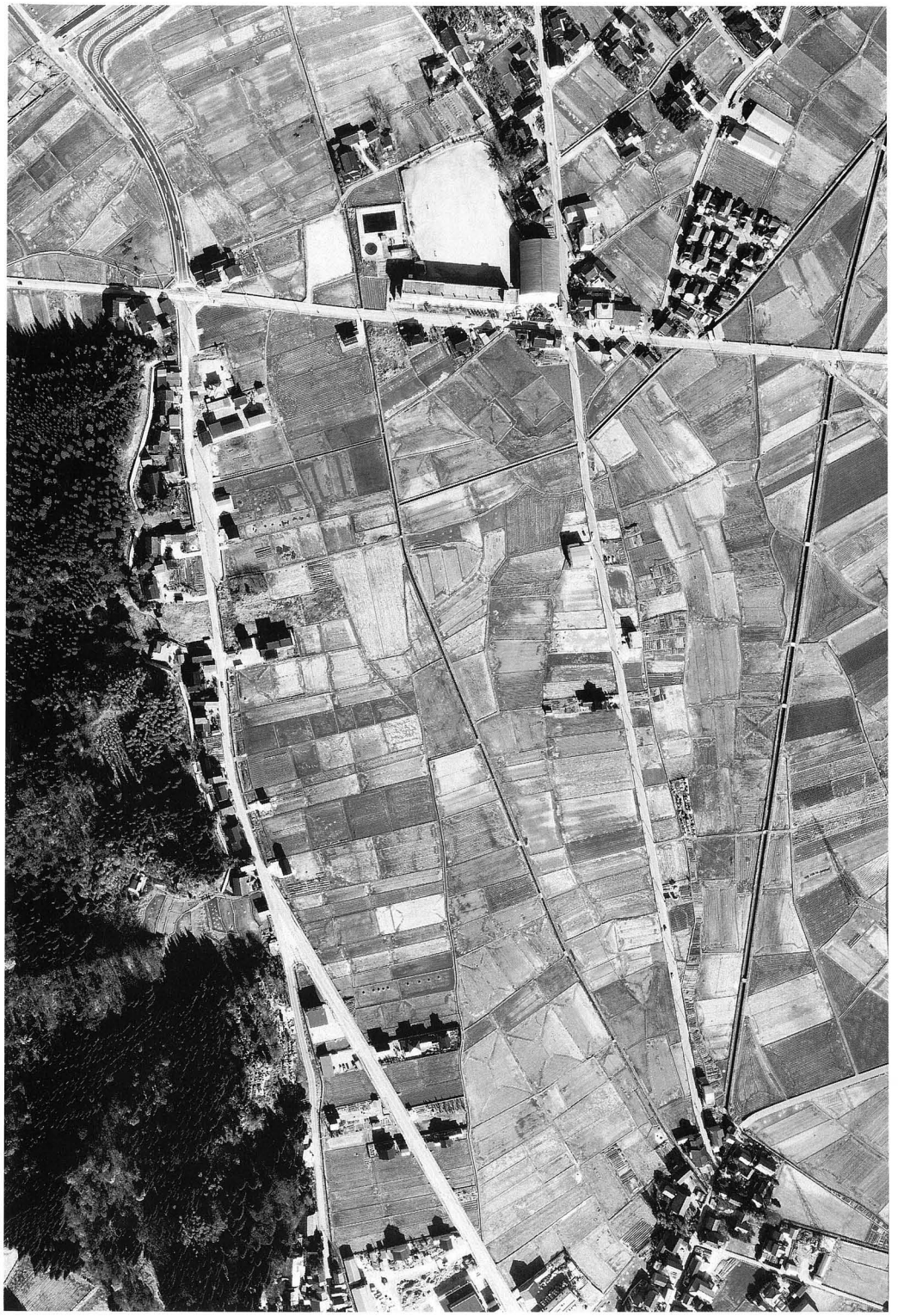
写　真　図　版

図版1　空中写真



桜町遺跡周辺と小矢部市街地

図版2　空中写真(2)

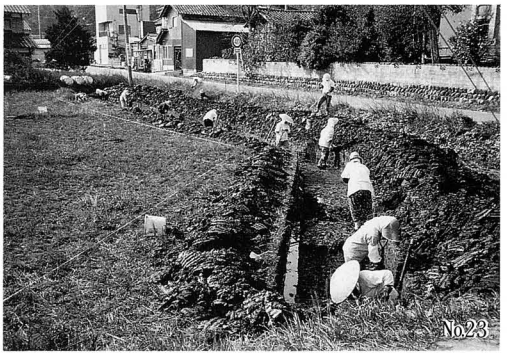


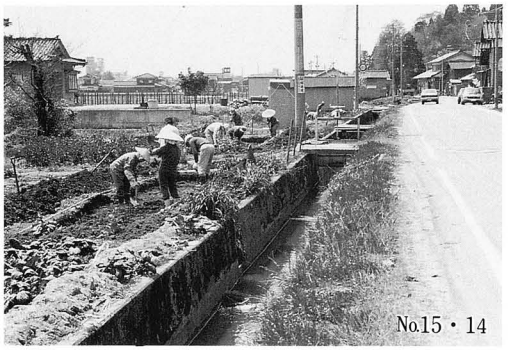
雀谷地区周辺

No.3

No.22

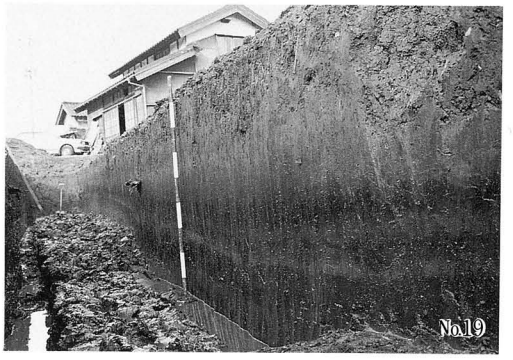
No.13


No.23

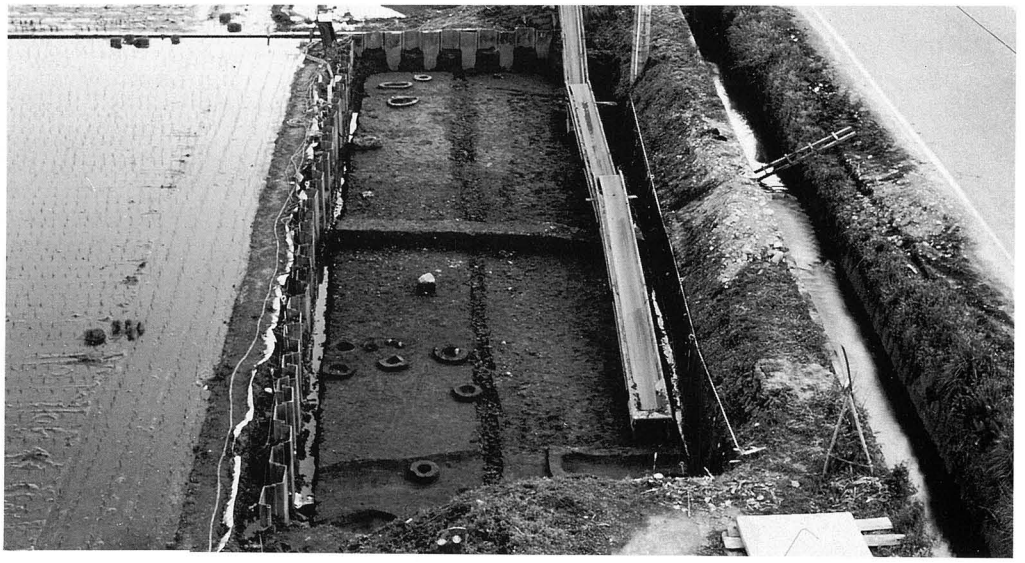

No.15・14

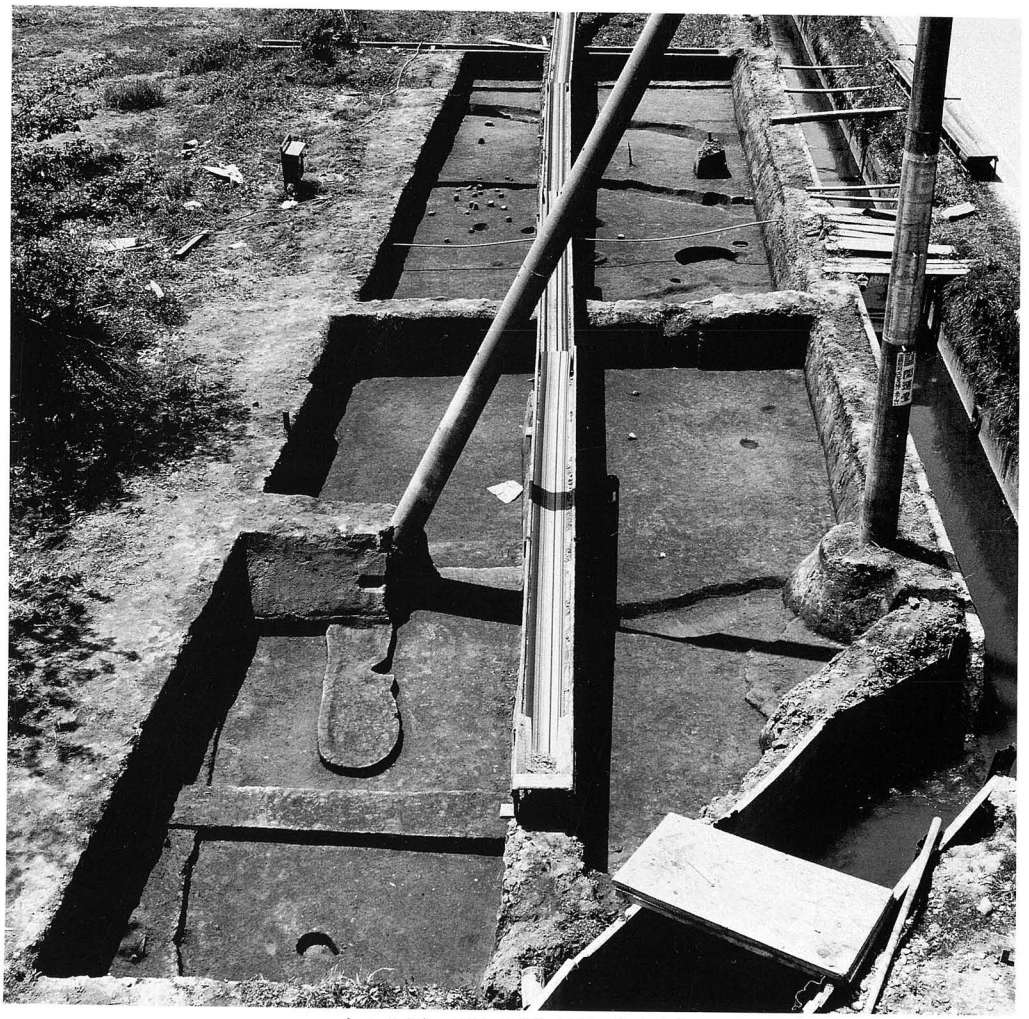
No.19

No.14


No.19

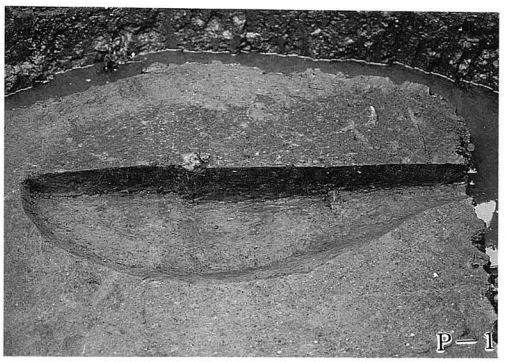
図版4　A・B区全景



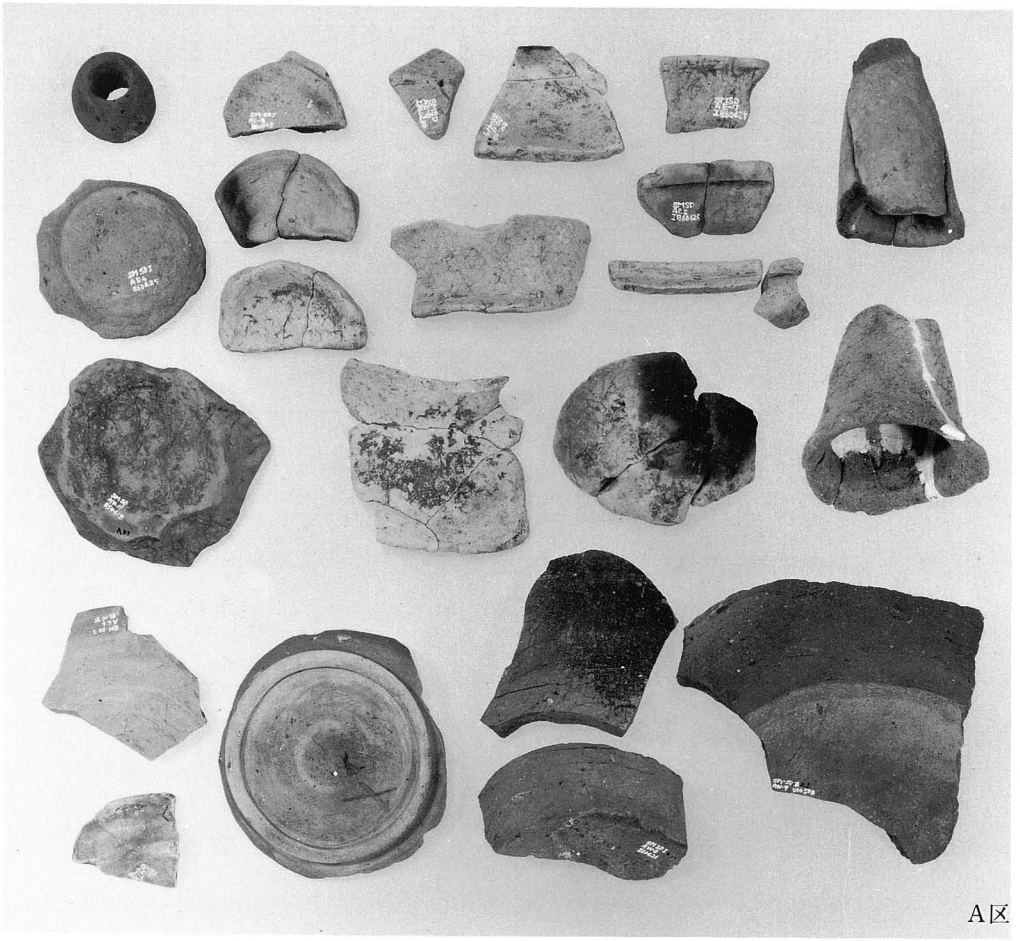


上：A区、下：B区（共に北から）

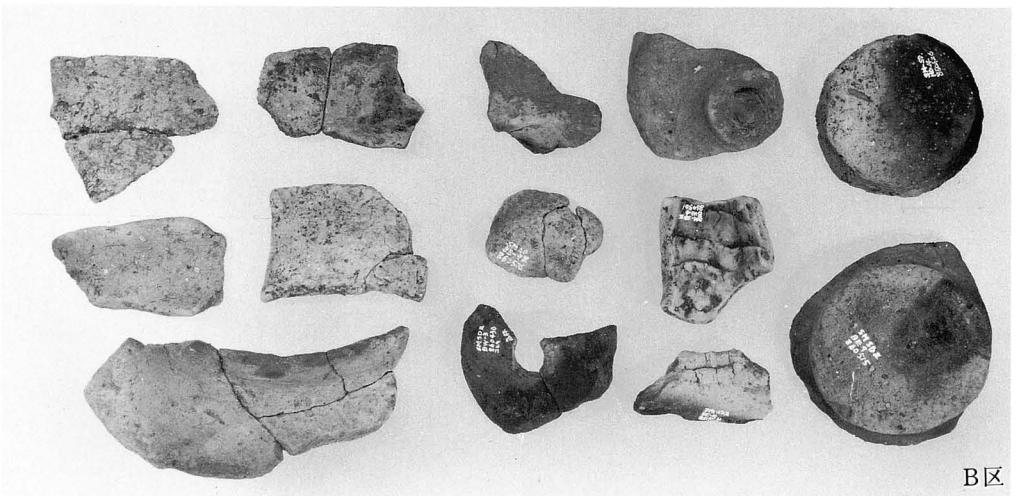
図版5　A区遺構・遺物・土層断面



図版6　A・B区出土遺物

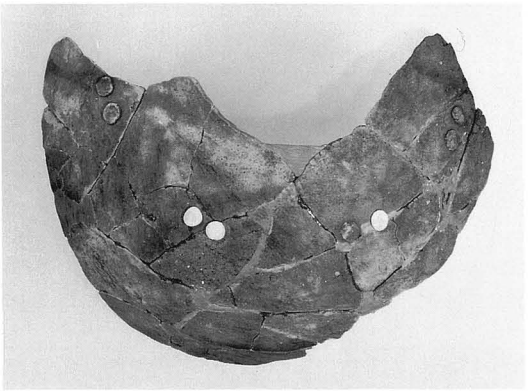


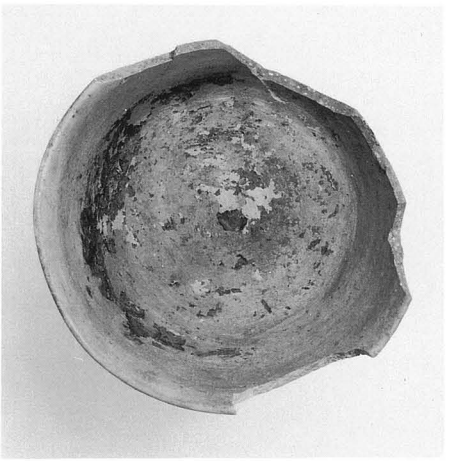
A区

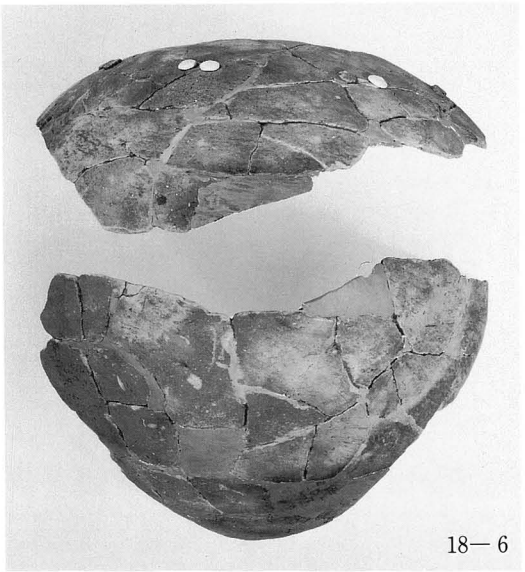


B区

図版7　A・C・試掘区出土遺物

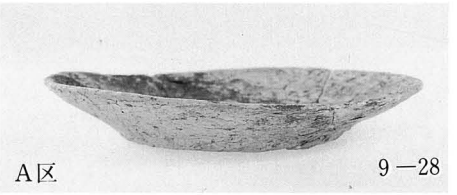






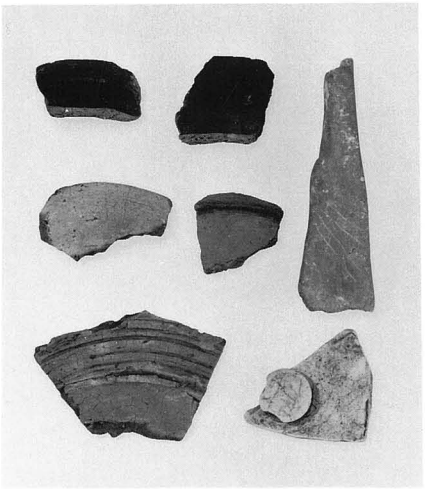
18—6

8—13

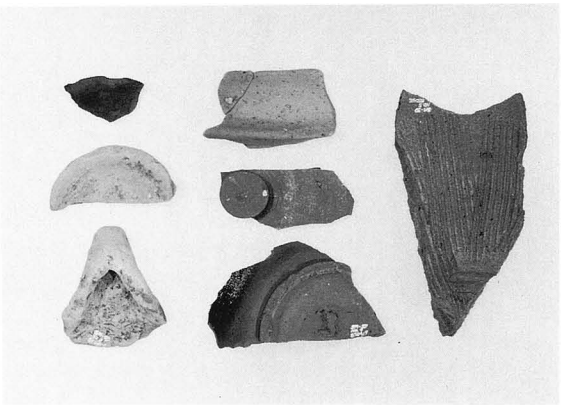


A区

9—28



←C区



↑
試掘トレンチ

図版8　D区北全景

D区　北から

D区　南から

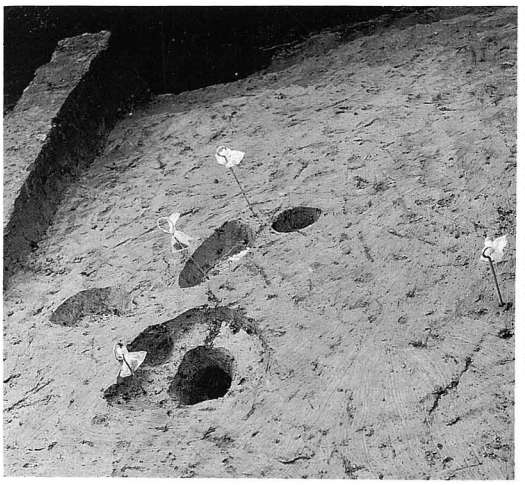
図版9　D区南全景

D区　中央

D区　南（南から）

D区　南（北から）

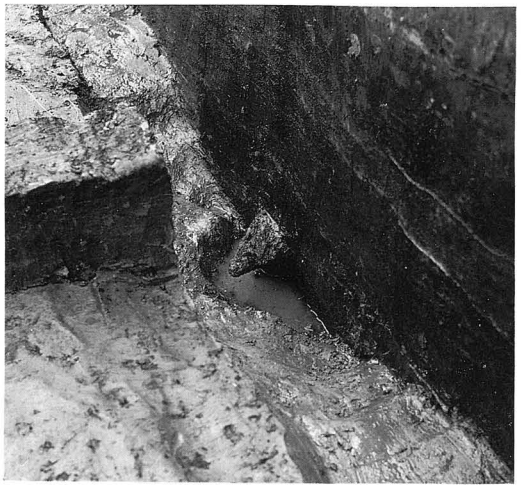
D区　縄文粗製深鉢（J 35、36）



D区　穴（P 2）

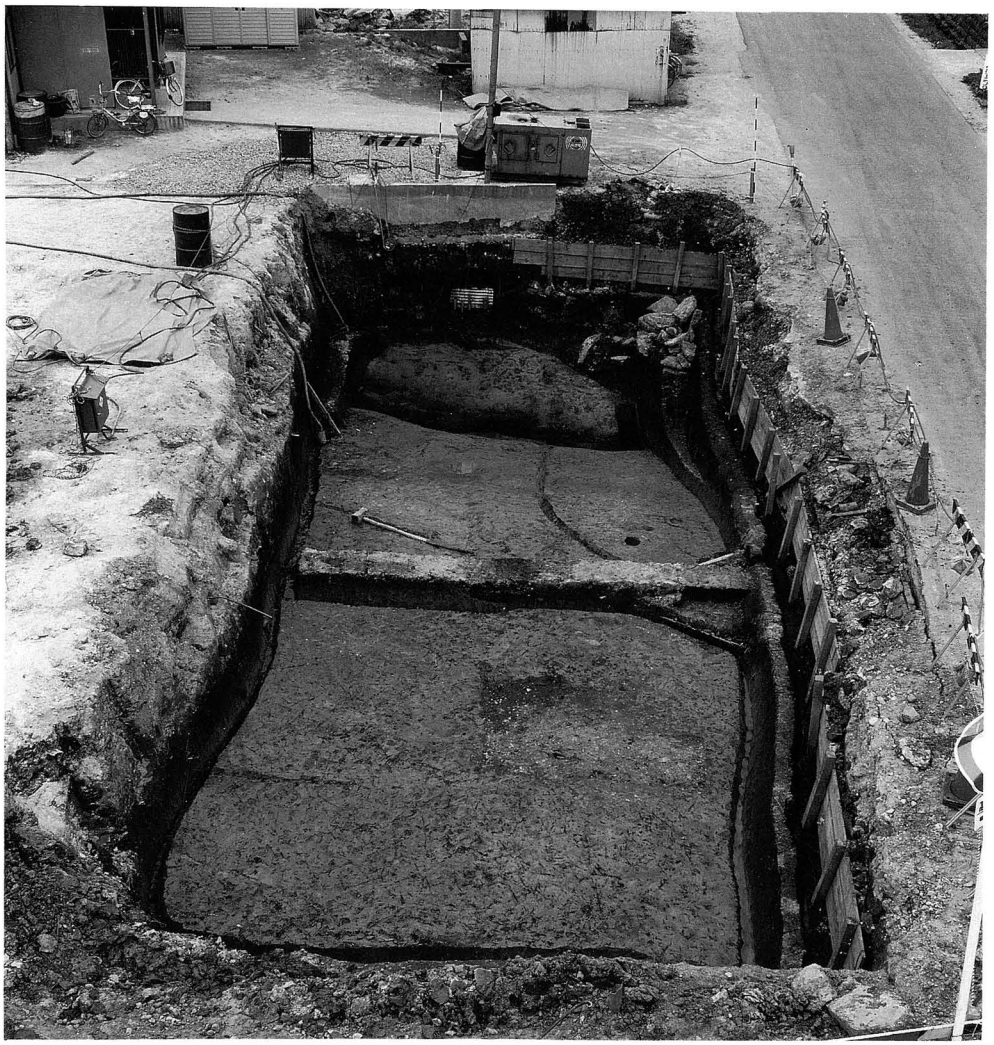
D区　穴と縄文土器（P 1）

D区　木材出土状況



D区　中央落ち込み（近）

D区　中央落ち込み（遠）



C区　北から

C区　溝（西から）

C区　溝断面（西壁）

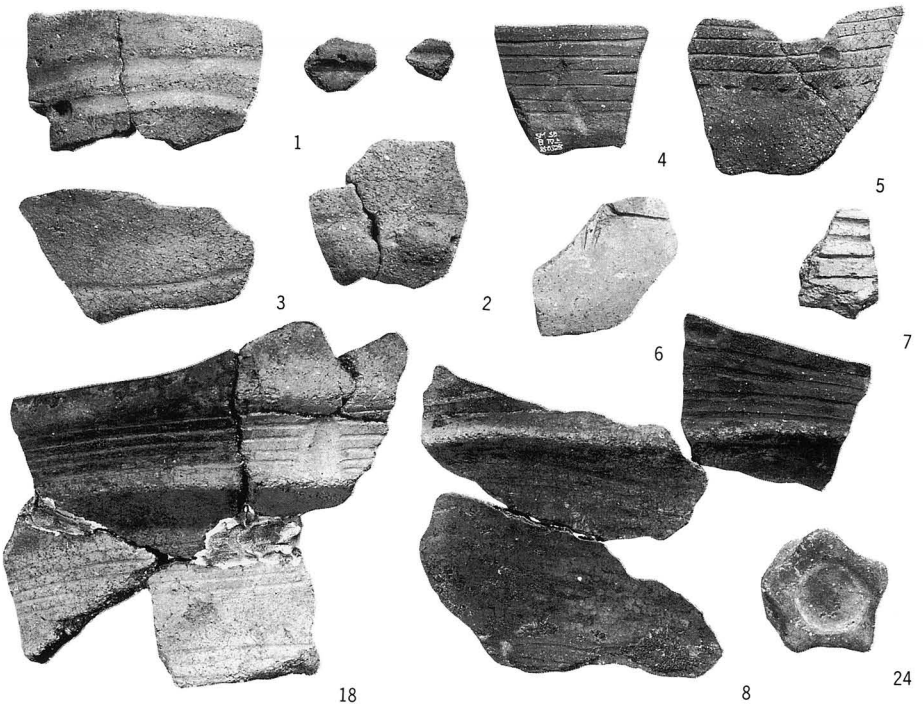
C区　縄文浅鉢（J 20）

C区　弥生壺（Y 6）

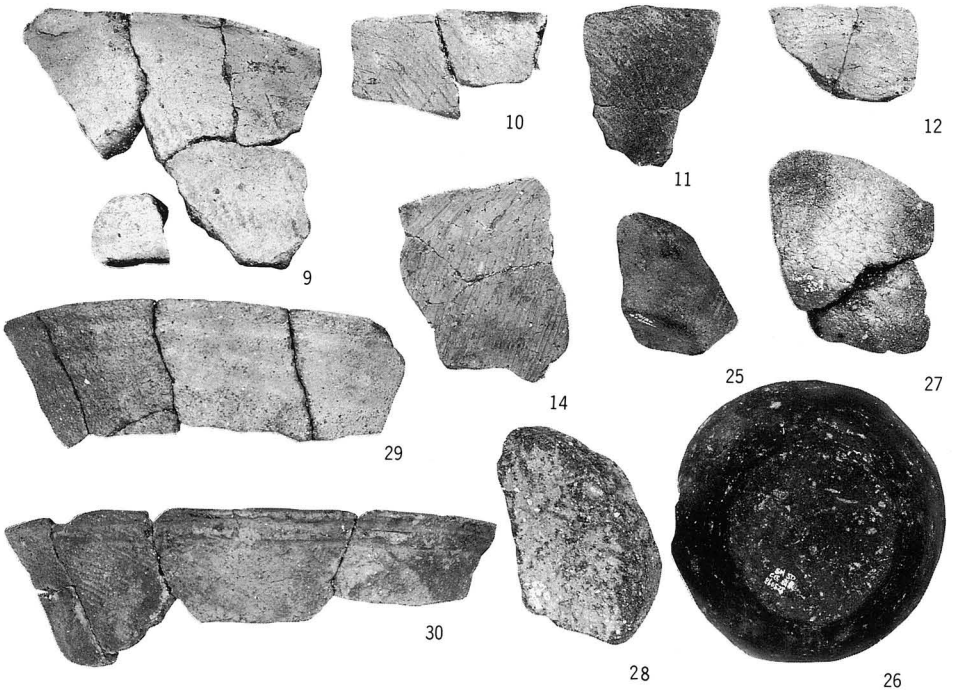
C区　縄文粗製深鉢（J 21、33、34）

C区　縄文粗製深鉢（J 32）

C区　南、木材出土状況（スダジイ、タモ、ヤマナラシ）

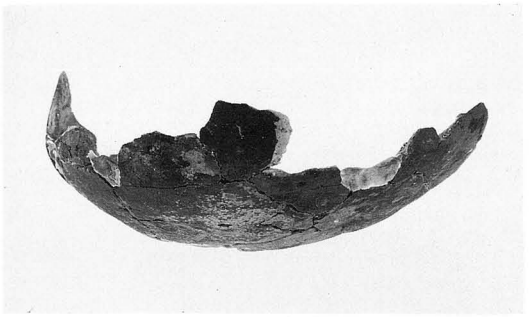


縄文土器

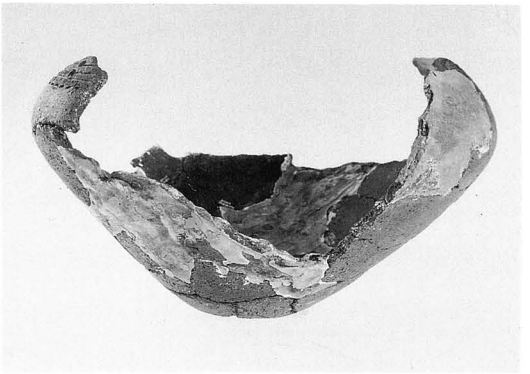


縄文土器

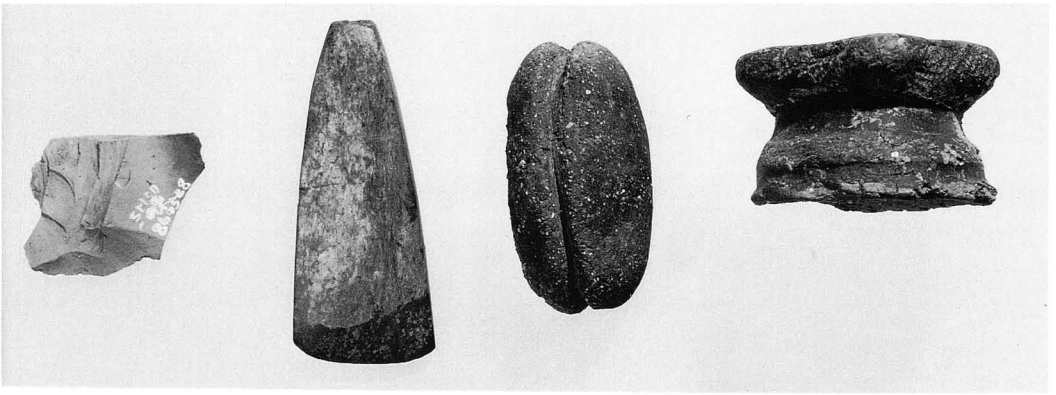
深鉢（21.16）



浅鉢（19）

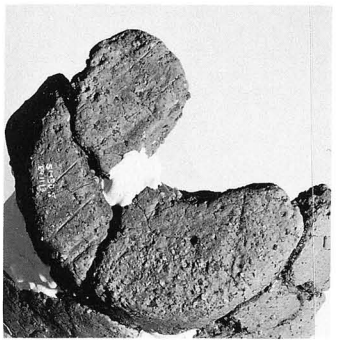


浅鉢（20.5）



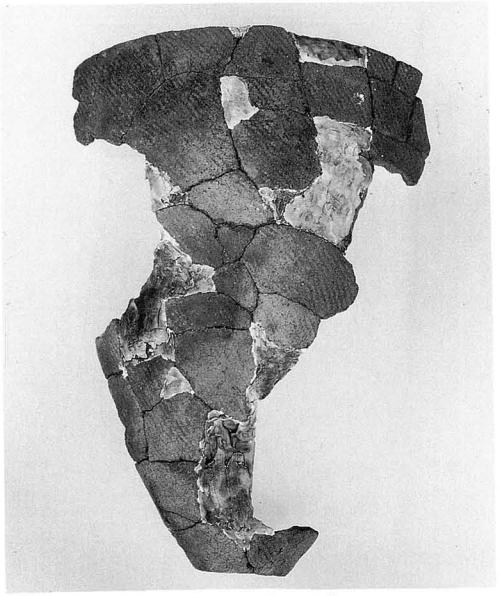
剝片（22）　磨製石斧（試1）　土錘（23）　蓋（24）

網代圧痕（17）

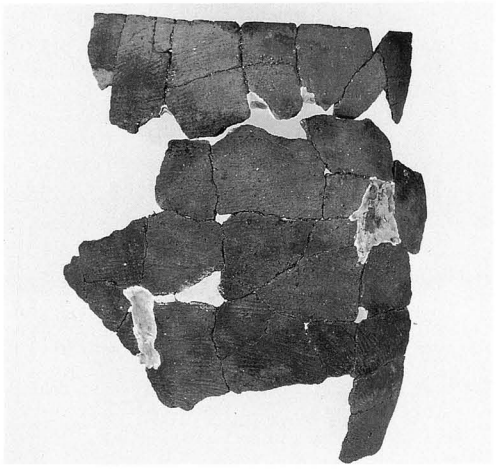


葉状圧痕（15）

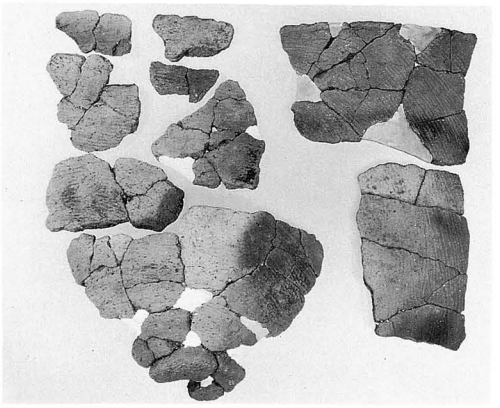
網代圧痕（16）



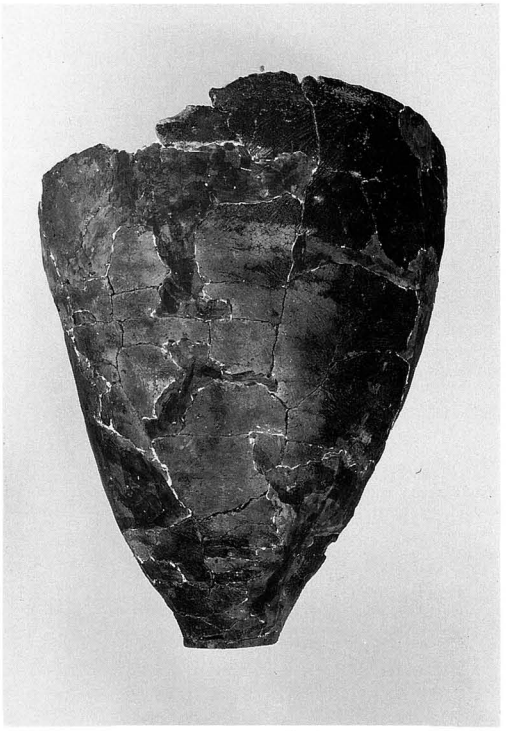
粗製深鉢（31.17）



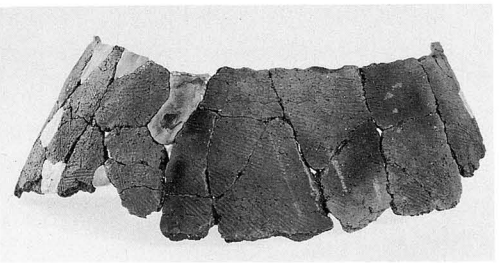
粗製深鉢（33）

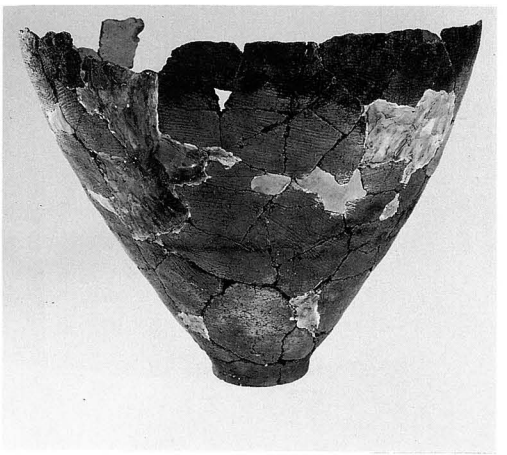


粗製深鉢（13、15、36）　粗製深鉢（35）



粗製深鉢（32）





粗製深鉢（34）

小矢部市埋蔵文化財調査報告書第21冊

富山県小矢部市　桜　町　遺　跡
—県道改良工事に伴う雀谷地区の調査—

発　行　日　　1987年3月25日

編集・発行　　小矢部市教育委員会
富山県小矢部市本町1番1号

印　　刷　　若　林　印　刷